
JINKI EXTEND NEXUS

ファンガス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

JINKI EXTEND NEXUS

【Nコード】

N4530P

【作者名】

ファンガス

【あらすじ】

海と山に囲まれた町、城ヶ崎市にある星湘高校に通うごく平凡な高校生、神野透は代り映えのしない日々に戻屈していた。

ある日、透は渡良瀬舞奈と名乗る女性と出会い、彼女とともに、柊神社の森に謎のコンテナが落下しているのを発見。そこで、明確な殺意を持った一人の男と機械の群れに遭遇する。

それは、南米にて頻発する大量虐殺「ロストライフ現象」の日本の上陸と、謎の人型ロボット「人機」をめぐる熾烈なる戦いの前兆であった。

果たして、透と舞奈は、迫り来る敵に打ち勝ち、この戦いを生き延びることができるのだろうか…？

小説オリジナル主人公とオリジナル人機による、新たな戦いが始まる。もちろん、原作キャラも登場！

オリジナル主人公・人機設定（前書き）

この作品は、いわゆる「処女作」です。

ですので、誤字・脱字や変な言葉遣いがあるかと思われます。

もし、見つけましたらご遠慮なく指摘してください。

また、この作品は原作を知らないと分かりづらい用語などがあります。

原作を知っていると、より楽しめるかと思います。

もちろん、原作を知らなくても楽しめるよう努めてまいりますので、少しでも興味を持ちましたらお立ち寄りいただけると幸いです。

指摘だけでなく、応援や感想もお待ちしております。

（注） 12月23日に設定を一部変更しました。

オリジナル主人公・人機設定

主人公

神野透^{しんの とおる} 17歳

星湘高校2年生。人機「スサノオ」の操主。まっすぐに正義感も強いが、積極的になれない臆病な面がある。また、人とはどこか距離を置いている。

ヒロイン

渡良瀬舞奈^{わたらせ まいな} 19歳

「アンヘル」所属の少女。人機「スサノオ」のサブパイロット。常に冷静だが、透を時にはやさしく支え、時には厳しくするお姉さんのような人。透の父親に「スサノオ」と透を守るよう頼まれた。

人機

スサノオ

操主：神野透&渡良瀬舞奈

機体のカラーは白をメインにサブカラーの赤の二色が中心。頭部の左右に通信用アンテナが付いている。コクピットは複座式（トレーシステムは搭載されていない）。武装は左腕に装備されている小型の盾と左下腕に装備されている太刀「叢雲^{むらくも}」だけの近距離格闘に特化した機体。盾は展開することが出来、展開するとあらゆる物理攻撃を撥ね返すことのできる武装能力「リバウンドフォール」を発動する（しかし普段は使えない）。背部と脚部にはバーニアエンジンを装備（脚部のものは収納式）し、上空へのジャンプや戦闘時の加速機動に使用する。スサノオには本格的な空中稼働能力はないが、それら推進力を使って滑空程度の飛行ならば可能。

オリジナル主人公・人機設定（後書き）

今回は本編オリジナル主人公と主人公の人機を紹介させていただき
ました。

設定はこれですべてではありません。物語が進むにつれ、二人と一
機の秘密を公開していく予定です。

なお、物語は次回から始まりますのでご了承ください。

特になにもないと思いますが、応援・感想・指摘などお待ちしております。
ります。

変更点は「スサノオ・戒」から「スサノオ」になったことと、「リ
バウンドフォール」という技（？）に条件をつけたことです。物語
に影響は今のところ無いと思いますが、一度目を通していただける
と幸いです。勝手な変更をしまい申し訳ございません。

プロローグ（前書き）

以前、次回から本編を開始しますと申し上げましたが、誠に勝手ながらプロローグを投稿させていただきました。勝手な変更をしてしまい、申し訳ございません。

ブローグ

夜が深まり人々が自宅で夕食を食べたり、あるいはテレビを見ながら家族や友人と談笑している頃、夜空に3機の大型ヘリコプターがコンテナを吊るしながら、飛んでいた。

その一台に女性が3人搭乗している。一人は大人の女性で、黒いロングストレートヘアをしている。その女性の隣に座っているのは、幼い体型をした少女。薄紫の髪に蟹の鋏の髪留めを左右につけているのが特徴的である。そして二人と向きあつて座っている女性は二人のちょうど中間くらい、18、9歳くらいと思われる。グレーのショートカットの髪に青いベレー帽を被り、帽子と同じ色の青いジャケットを着ている。

「今のところは順調ね」

大人の女性がヘリを操縦している男性に声をかけた。男性はあきらかに自衛隊の格好をしていた。

「ええ、大型輸送ヘリ3機で吊り下げて、やっと空輸できるコンテナですからね」

自衛隊員は明るく答えた。

「ちょうど城ヶ崎市上空か。このまま基地に着くまで何も起こらないですよ」

女性が祈るようにつぶやいた。すると彼女の隣に座っていた少女が突然窓から外を見まわし始めた。

「ルイ、どうかしたの？」

二人の向かいに座っている少女が訊ねた。

「何か……、視線のようなものを感じる。……っ！南！！」

少女、黄坂ルイが叫んだ瞬間、突然輸送ヘリが大きく揺れた。

「まさか、敵機！？」

女性、黄坂南がルイに訊いた。

「バーゴイル2機！！」

「そんな！いつの間に！？」

自衛隊員は慌て周囲を見回した。しかし、敵機らしきものは見当たらない。

「レーダーの効きにくい低空から！！」

攻撃してきたのは、「バーゴイル」と呼ばれる人型のロボットである。バーゴイルは手に持っているブレードを輸送ヘリに向けた。するとブレードの刃が上下に開き、そこから銃口が出てきた。

「撃ってくる！プレッシャーガンよ！！」

南が叫んだ直後、バーゴイルの持っているブレードから閃光が放たれた。輸送ヘリは閃光をうまく避けたが、コンテナを吊るしたワイヤーが切れてしまい機体が傾いてしまった。

「うわっ！！」

「2番機と3番機のワイヤーが切れた！！」

自衛隊員が必死で輸送ヘリを制御しようとするが、コンテナの重さで機体の高度が徐々に下がっていった。

「だ……ダメですつ。本機だけではコンテナを維持できません！」

「バーゴイルがコンテナに取りつく！！」

「くっ、やつらに持ってかれるくらいなら……！ワイヤーを切り離して！コンテナを落とすわ！！」

南の指示に自衛隊員は慌てふためいた。

「こ、こんな所ですか！？市内上空です、下には住宅地が！」

自衛隊員の言う通り、今、輸送ヘリは住宅地上空を飛んでいる。

ここでコンテナを落とせばどうなるか、容易に想像できる。当然、南もそのことを承知している。しかし、彼女の意思は固かった。

「そんなこと、分かってるわよ！でも、これをやつらの手に渡すわけにはいかないの！！だから、ワイヤーを切り離して！もし、落として被害が出たら、責任はすべて私が取るわ」

「……わかりました。ワイヤーを切り離します！タイミングはそちらに任せます！！」

自衛隊員は南の覚悟を感じ取り、ワイヤーの切り離し作業を始め

た。

「わかったわ。ルイ、頼むわよ！」

「んっ……！」

南はルイにまかせると、ルイは静かに目を閉じた。

「ワイヤーを切り離して……！」

「了解、ワイヤー切り離します！」

南の掛け声で、ワイヤーは切り離されコンテナが降下を始めた。

コンテナはあつという間に真下にある森の中に落下していった。コンテナを切り離したことで輸送ヘリは傾いた機体を元に修正することが出来た。2機のバーゴイルはコンテナを追わず、遙か上空へと飛び去っていった。

「敵機、離れていきます！」

「私たちには目もくれないわね。それとも……。ルイ、あんたは大丈夫？」

「ん……。うん。コンテナは静かに降ろした。誰も気づいていないし、被害も出ていない」

「この高さから落としたのに……！」

自衛隊員はルイの言葉に驚愕した。しかし事実、コンテナが落下したであろう場所からは土煙は一切出ておらず、警察や救急隊が出動している様子もなかった。

「しかし、あのコンテナ、これからどうするのですか？このままにしておくわけにはいかないでしょう」

自衛隊員の言う通り、彼らが運んでいたコンテナの中に入っているのは、言わば軍事機密のものである。森の中に落ちたとはいえ、放置しておけば遅かれ早かれ民間人に見つかってしまう。そうなれば、あらゆる面で大問題になってしまう。

「そうねえ、もちろん回収はするけど……」

「それについては、私に任せてもらえないでしょうか？」

南がどうするか考えていると、少女が名乗り出た。

「舞奈？あんたが行くの？」

「はい。あのコンテナの中のは長官が私に託したものです。正確には私ではなく、長官の息子に託したのですが……。私はコンテナにつまれた『人機』と長官の息子を守ることが任務の一つです。私が『人機』を回収して同時に“彼”を保護します。南さん、私にまかせてください。お願いします」

少女、渡良瀬舞奈は南に深く頭を下げた。

「わかった。じゃ、舞奈、あんたに任せるわ。頼むわね」

「はい、ありがとうございます！」

舞奈は笑みを浮かべて、南に深く頭を下げた。輸送へりは舞奈の覚悟を乗せて、基地へと向かっていった。

プロローグ（後書き）

次回からちゃんと本編に入ります。

感想・指摘などがございましたら、遠慮なく申し上げてください。
応援もお待ちしております。

1 - 1 (前書き)

お待たせいたしました。いよいよ本編スタートです。

夢を見ていた。最近になって同じ夢を見るようになった。一人の少年と一人の少女が出てくる。二人とも小学生くらいで、少女のほうはやや幼い顔立ちをしている。顔はよく見えないが、二人は手をつないでおりどちらも仲がよさそうに顔を見合って笑っている。仲の良い友人同士とも、兄妹とも見て取れる。しかし、この二人は誰なのか、夢を見ている本人には心当たりがなかった。そして、なぜ自分がこのような夢を見るのか見当もつかない。ただ、二人を見ていると心が温まる感じがした。それと同時に、幸せそうな様子が恨めしく感じてしまう。

二人に手を伸ばしてみると、その姿がぼやけた。そして、視界が眩しいくらいの白に染まった。

「う、うん……。むにやむにや……」

柊赤緒は机の上でうつ伏せになって眠っていた。本当に熟睡しているのか、幸せそうな寝顔によだれが出ていた。

「柊さん、起きなよ。もう、授業終わったよ？」

赤緒を起こそうと神野透は、彼女の体を揺すった。しかし、赤緒に起きる気配は感じられなかった。むしろ気持ちが良かったのか、口元に笑みを浮かべた。

「……起きないな」

透はなかなか目を覚まさない赤緒に先程よりも強く揺すろうとするが、その手を一人の男が止めた。

「ダメだダメだ。お前は女の子の扱いが全くなっちゃいない」

「起こしてあげろって言ったのは、勝世だろ？」

男の名前は勝世^{しょうせい}。透にとってはいわゆる悪友と言えるクラスメイトである。

「いいか？女の子ってのはデリケートなんだ。優しくしなきゃダメだろ？それに今の赤緒ちゃんも眠り姫だ。眠り姫を起こす方法はた

だ一つ！わかるだろ？」

勝世は口を吊り上げて、にっと笑みを浮かべた。この顔をする彼が何を考えているのか、透はうすうす理解し始めていた。

「ど、どうするんだよ？」

あえて自分から言わず、透は勝世に訊いた。

「わかつてるくせによ。キスだよ、キス。眠れる美女にはキスで目を覚ましてもらうのがお約束だろ？」

勝世はさらに口を吊り上げてあやしい笑みを透に見せた。

彼は自他共に認めるプレイボーイである。女性を見ればすぐに声をかけ、そして玉碎されるのを透は何度も見てきた。

「なっ！何で僕がそんなことしなきゃいけないんだよ！？」

「俺は別にお前がしろなんて言ってないぜ。でも、お前がイヤなら俺がやるぜ。安心しろ、お前と違って女の子の扱いには慣れてるからよ」

勝世は指を動かしながら、赤緒へと両手を伸ばした。

「や、やめろっ！！」

透は勝世と赤緒の間に入り込んで勝世の両手をつかんだ。しかし、勢いをつけて割り込んだので足が赤緒の椅子の脚に当たってしまった。

「ふ、ふえ？」

椅子が大きく動いたことで、赤緒がゆっくりと目を開けた。

「あ、ご、ごめん。起こしちゃった？」

「起こそうとしてたんだろ、俺たち。しかもなかなかロマンチックな方法で」

「お、おい……！」

「ん……。透君……。どうしたの？」

赤緒の間の抜けた一声に、透は溜息をついた。だが、今の勝世とのやりとりを聞いていなかったことに内心ほっとしていた。

「惜しい、今ので起きなかったら、赤緒ちゃんの初めてをいただくかと思ったのに」

「お前、本当にするつもりだったのか!？」

透は思わず勝世に掴み掛ろうとしたが、すぐに腕を降ろした。

「え?何、何の話?」

「う、うん。何でもなし!それよりもやっと起きたね。もうすぐ、ホームルームだよ?」

「あ……あう……。また、やつちやった……」

赤緒は今の状況を理解すると、少しずつ顔が赤くなっていった。

「五郎さんが言ってたよ。地鎮祭で立ったまま居眠りする人なんて初めて見たって」

「ご、ごめんなさい……。ダメだなあ私……」

透の言葉を聞いて、赤緒は気を落とした。

「そんなことねえよ。休みの日でも神社の手伝いをするなんて、赤緒ちゃんをよくやってるよ。確か3年前に引き取ってもらったんだっけ?」

「うん。私、五郎さんにお世話になりっぱなしだから恩返ししようと思って。だから、もっとしっかりしないと!」

赤緒は3年前、彼女たちが通っている星湘高校の近所にある柊神社に引き取られた。彼女が言うには、自分は記憶喪失で以前のことを覚えていないとのことだ。彼女を保護した人のツテにより柊神社で神主を務めている五郎と出会い、彼女の身元を引き受けたのである。透と出会ったのも、3年前である。当時の透は、両親はすでに他界しており親戚の叔父叔母夫婦の元で生活していた。叔父叔母夫婦は五郎とも親戚でその縁で透は度々柊神社へ通っていた。そして赤緒と出会った。

「それで、どんな夢を見てたんだい?寝言で何か言ってたみたいだったけど」

「うん、ここ最近よく見る夢なんだ……」

勝世に夢の内容を訊かれ、赤緒はゆっくりと口を開いて話し始めた。

「小学生くらいの男の子とその子よりちょっと小さい女の子が仲良

く遊んでいるの」

「うーん、何か意味深だな。まさか、その子供は赤緒ちゃんの子供じゃないのか!？」

「そんな訳ないだろ。それだったら何歳で産んだことになるんだよ?」

「いや、否定はできないぜ。赤緒ちゃんは記憶喪失なんだ。見た目以上に年上かもしれないんだぞ?もしかしたら、結婚してるかもよ?」

「勝世……。お前な……」

勝世の妄想に透はあきれて溜息をついた。ふと赤緒を見ると、真剣な面持ちをしていた。

「そっか……。私、結婚しているかもしれないんだ……」

「ひ、柊さん……。?まさか、本気にしてるんじゃないよね?」

「えっ!? あ、う、うん! 大丈夫だよ!」

赤緒が若干うろたえたところを見て、透はますます不安になった。

「ま、冗談はさておき、記憶喪失なんて気にすることねえよ」

「……うん、でも、時々不安になっちゃうの。記憶のない3年前より以前、私はどこで何をしていたのだろうって」

「柊さん……」

赤緒のさびしそうな顔を見て、透はいたたまれなくなった。自分に何かしてあげられることは、気が利くことが言えないだろうか。

そう考えていると、自然と口が開いた。

「……別にいいんじゃないかな」

「透君?」

透の突然の発言に赤緒はまっすぐ彼の顔を見つめた。

透は思わず口を閉じてしまったが、もう遅かった。赤緒がその先のことを聞きたがっているので、ゆっくりと自分の考えを口にした。「その、上手く言えないけど、過去のことよりこれから楽しめばいいんじゃないかな。そりゃ過去がある方がいいかもしれないけど、別になくても生きていけるんだし。ここから思い出のスタートに

してもいいんじゃないか？」

一通りしゃべってから、大きく一息をついた。ぎこちないしゃべり方になってしまったな、と感じていたが、透の言葉を聞いた赤緒は呆けた顔をしていた。そして、今度はやさしい笑みを浮かべた。

「うん、そうだね。ありがとう、透君」

「う、うん……」

透は素っ気なく答え顔を少し赤らめながら、視線を赤緒から逸らした。

*

その様子を廊下から見ていた女子学生がいた。彼女は透たちの教室から少し離れた所から携帯電話を掛けている。

「はい、間違いありません。神野透本人です。ちゃんと反応も示しています」

彼女は視線を透から逸らすことなく、話している。

「了解です。では、放課後、一人になったところで接触します」

そう言って、彼女は電話を切り、溜息をついた。目を閉じ軽く深呼吸をしてもう一度、透に目を向けた。

「……透」

彼女は様々な感情が込められているような声で、少年の名をささやいた。

1 - 1 (後書き)

感想・指摘・応援、お待ちしております。

1 - 2 (前書き)

お詫び

前回の投稿ですが、投稿当初は「第一章」としていましたが、作者の勝手な都合により現在の「1 - 1」と変更させていただきました。しかし、すぐに報告しなかったことで読者の皆様にご迷惑をおかけしたことだと思っています。この場で謝罪させていただきます。ご迷惑おかけして申し訳ございませんでした。今後、このようなことが起こらないよう細心の注意を払って投稿するよう気をつけます。すぐに変更しましたが、もし「第一章」で作品を読んでくださった方、変更したのはタイトルだけで内容は一切変化しておりません。長くなってしまいましたが、それでは物語の続きをお楽しみください。

放課後、透は一人で自宅へと向かっていた。教室を出る前、勝世に遊びの誘いを受けたが、遊びの内容を聞いたら、いわゆるナンパだったので丁重に断った。透は友人が少ない方なので、一人で下校することが多い。なので、透にとっては別段変ったことではない。

自宅は丘の上にある住宅街にあるアパートで一人暮らしをしている。高校に入学するのをきっかけに世話になった叔父叔母夫婦の家から出ることにした。叔父のツテで現在住んでいるアパートを紹介してもらい、今のところ安定した一人暮らしを送っている。

丘の上へと続く坂道を登りきった所で、一人の女子学生がいた。制服を見て、透と同じ星湘高校のものだった。この先は住宅街なので人がいても別に不思議ではない。彼女は透の姿を見ると、ふつと微かに笑みを浮かべながら透に近づいてきた。

「神野透君…… よね？」

「ど、どうして僕の名前を……。君は？」

見覚えがない女子生徒から、いきなり名前を呼ばれて透は緊張した。不信感というのもあるが、それだけではない。端正な顔立ちをしており、学生の割には妙に大人びているように感じられる。これ程の美少女が自分にどのような用件なのか、少し期待している自分もいた。

「ひ……、はじめまして、私は渡良瀬舞奈。星湘高校3年よ」

舞奈は自己紹介すると、透に向って手を差し出した。どうやら握手らしい。

「は、はあ……」

透は差し出された舞奈の手を握った。細い指と手の温かさやわらかさを感じ、女性に慣れていない透は、顔を赤くしていった。そんな透の様子を見て、舞奈はくすつと笑みを漏らした。

「女性の手を握るのは慣れてない？」

「べ、別にそんなのじゃないよ！……ところで、僕に何か用ですか？」

舞奈に子供扱いされた感じがして、透は不機嫌な顔をして用件を聞いた。

「ええ。実は君に渡したいものがあるの。今から私に付き合ってもらえないかしら？」

舞奈は先程までの優しい笑みを消し、真剣な顔で言った。

「渡したいものって、何ですか……？」

透も舞奈の様子の変化に緊張し、少し震えた声で聞いた。

「それは、……っ！？」

舞奈が何か口にしようとした瞬間、突然、透の背後に回った。

「邪魔だ、どけー！」

それと同時に、後ろのやや離れた所から男の声が聞こえてきた。

「えっ！？」

「うつ……！！」

透が振り返ると、一人の男がこちらに向かってきた。男の動きはとても速く、体全体が男の方を向いた時、舞奈は吹き飛ばされ、地面に倒れ込んでいた。

「渡良瀬さ、ぐわっ！！」

舞奈の名を呼ぼうとしたら、男の手が透の首を掴み、壁に叩きつけた。しかも、片手で透を持ち上げ、透の足は空を蹴った。

「ぐ……あっ」

口から苦しい悲鳴が漏れる。一体、自分の身に何が起こったのか、理解出来ずにいた。

「言え。お前らの仲間に、刀使いはいるか？」

「かた、な……つかい？」

透は男の言葉をオウム返しに言うことしかできなかった。それもそのはず、今の状況を把握しきれていないのに、これまで聞いたことのない非常識な質問をされているのだ。

「ああ、そつだ。いるのか？いないのか？」

「な、なんのことだよ……」

「とばけるな！知ってることを一つ残さず全部吐け！」

男の双眸に込められた、獰猛な輝きが透の体を貫いていた。そこに、身を焦がす怒りを、かろうじて押さえ込む気配を透は微かに感じていた。しかし、そんなことを感じている余裕はなかった。男の手に少しずつ力が加わっているのだ。

（このままじゃ、殺される……）

透の体に恐怖が走った。

（どうして僕は、こんな目に遭っているんだ……？）

そして、恐怖が怒りへと変わりつつあった。

（どうして僕が、こんな目に遭わなきゃならないんだ……！）

体の奥底から強烈な感情が滲み出て、体を支配していく。

（……こいつは、敵ダ。オレの……）

激情が精神を侵食していく。脳裏に透にとって忌まわしい出来事が浮かび出てきた。

はじめて人を傷つけたあの日を。自分の中に眠る凶暴性に気付いたあの日を。そして、二度とあの感情を表に出さないと誓ったあの日を。

しかし、激情に支配されつつある透はその誓いを破ろうと、同じ過ちを繰り返そうとしていた。

（そんなことはどうでもいい……！今は、こいつを……！！）

「オ、マエを……！」

感情が完全に体を侵食する直前、男が突然、手を離れた。あまりに突然のことで透はそのまま地面に座り込んでしまった。

「ゴホッ！ゴホッ！な、何だ……？」

せき込みながら、男を見上げた。男は両手を上げ視線を横にやっていた。男のすぐ背後でカチツという音が聞こえた。

「そこまでよ。それ以上、彼を傷つけたら、問答無用で頭を打ち抜くわよ？」

「わ、渡良瀬、さん……！」

男の背後には、舞奈が立っていた。舞奈は拳銃を持っており、銃口を男の後頭部に押し当てていた。しかも、安全装置が解除されていた。

「……………」

男は口を閉じていた。しかし、獰猛な気配が先程までではないが、まだ少し感じられた。

「ずいぶんと手荒なことをするのね。……あなた、おがわりょうへい小河原両兵でしよ？」

「……俺の名前を知ってるってことは、おめえ、『アンヘル』の間か？」

「ええ、そうよ」

二人が何の会話をしているのか、透には意味不明だった。

「それで、どうして彼を狙ったの？あなたがここまでするということとは、よほど大変なことじゃない？」

「……アンヘルの人間には関係ねえよ。おめえこそ、こいつをえらく気に入っているみたいじゃねえか」

「それこそ、あなたに関係ないわ」

そう言つと、舞奈は銃口をさらに両兵の後頭部に押し付ける。

「こんな所でぶつ放すのか？アンヘルも堕ちたな」

「……私は彼のためなら、なんだってするわ。たとえ、それが人の命を奪う事でもね」

「……渡良瀬さん？」

一連の流れを聞いていた透は疑問を感じていた。彼女の行動を見て、彼女が軍人かその関係者というのは何となく理解した。しかし、透は「アンヘル」とはどんな組織なのか聞いたことがなかった。透の父親は軍人で地位の高い所の所属だった。その影響もあって軍のことに關しては、普通の人よりやや知識はあるつもりだが、「アンヘル」というのは初めて聞いた言葉だった。それに、舞奈が自分を助けてくれるような行動をとるのも謎だった。そんなことを考えていたら、先程までの激情がいつの間にか引いており、冷静さを取り

戻していることに気付いた。

「……。これが反応してたんだよ。てつきりこいつが『八将人』^{はちしょうじん}だ
と思ったんだが……。これもアテにならないな」

そう言つて、両兵は先程までの獰猛さとはまるで別人のような呆
れ顔で、懷から変わった形をした金属片を取り出した。金属片は菱
形を組み合わせた形をしており、不思議な輝きを帯びて、かすかに
震えていた。

「それは……」

透は金属片に見覚えがあつた。しかし、どこで見たのかは思い出
せなかつた。

「違つたんならいいや。悪かつたな」

両兵は一言謝罪すると、歩み去つていく。それはまるで、獲物を
間違えた肉食獣が関心を失つたかのようにも見えた。

「ちょ、ちよつと……！」

「待ちなさい」

透が止めようとするより早く、舞奈が両兵に声を掛けた。

「……何だよ。まだ用があんのか？」

舞奈の制止の声に、両兵は顔だけこちらに向けた。

「あなたが、あの『小河原両兵』なら、いろいろ話を聞かせてくれ
ないかしら？特に彼にね」

舞奈はそう言つて、視線を透に向けた。

「え？僕？な、なんで？」

透の疑問に舞奈から答えは出てこなかつた。代わりに、両兵が正
面から透を見据えていた。その顔にはやや驚きの表情が浮かんでい
た。

「まさか、こいつは『血統』^{けっぞく}なのか……？」

「ケ、ケツゾク……？」

透が呟いたその時、甲高い音が三人の耳に入ってきた。音の発生
源は両兵が握っている不思議な金属片からだつた。次の瞬間、大き
な爆発音が轟いた。

「な、なんだ、今の爆発!？」

三人は爆発した方向を見た。青々とした木々の枝場から立ち上る黒煙と、オレンジ色の火の粉が視界に入った。そこは、柊神社のすぐ近くだった。

「あそこは、確か柊神社! 一体、何が起こってるんだ!？」

「……始まったな、いよいよ」

透の質問に答えたわけではないだろうが、両兵が静かに言った。

「とうとう、ここまで……」

舞奈も何が起こったのか理解していた。

「何だよ……? 何が始まったんだよ!？」

透の疑問に、両兵は今度はしっかり答えた。

「ロストライフ現象だ」

両兵の答えに透の顔が青ざめていった。

「ロストライフって、街が住民ごと消えるっていうアレのこと……?」

透の言葉に両兵は、ああ、と答えた。

「……ということは、あそこにあるのね」

舞奈が一人静かに呟いた。彼女の目には何かしらの決意が感じられた。そして、その決意の目を透へと向けた。

「透君、私と一緒に柊神社に行ってほしいの」

「え……?」

舞奈の言葉に透は言葉を失くした。冗談かと思っていたが、彼女の目はとても真剣で冗談を言っているようではなかった。

「な、何言ってるんだよ!？あそこに行くなんて、死に行くようなものじゃないか! 逃げるんだよ、渡良瀬さんも一緒に!」

透の言う通り、爆発が起こった場所では、今も小規模の爆発が起こっている。

「そうだな。行かない方がいいぜ。逃げるなら、さっさと逃げな」

両兵も透に賛同するが、それは透のことを心配してのことではないことを感じさせられるしゃべり方だった。

「……二人は、何か知っているのか？」

「さあ、俺はあれがロストライフ現象だってことぐらいだぜ。……おめえは、どうなんだ？」

両兵は投げやりな態度で答え、話を舞奈に振った。

「……………」

舞奈は沈黙した。そして、一度深呼吸をしてから静かに口を開いた。

「透君。あそこには、君のお父上が君に遺した『もの』があるの。私はそれを取りに行かなくてはならない。でも、私だけじゃ無理。透君の『力』が必要なの」

「父さんが、僕に、遺した……？僕の力が必要だって……？あそこに何があるんだ……！？」

「話は着いてから話すわ！今は私を信じて一緒に来て……！」

「ちよ、ちよつと……！！！」

舞奈は透の制止を振り切って、無理矢理、透の手を掴んで走り出した。

「そんな奴、連れて行ったところで足手まといになるだけじゃねえのか？」

両兵の挑発の言葉に、舞奈はあえて答えた。

「いいえ、彼は足手まといになんかならない。彼は私にとって、私たちにとって『新たな剣』よ……！」

それだけ答えて二人は柊神社へと走って行った。

*

両兵は二人の姿が見えなくなっただけからしばらく、見送った場所から一歩も動かずに立っていた。

「……………」

そして、二人の後を追って走り出した。

1 - 2 (後書き)

感想・指摘・声援お待ちしております。

ちなみにタイトルの数字ですが、大丈夫だと思いますが一応説明させていたくと、左の数字が話数、右は場面転換のときに使われるのと同じ用法の数字です。

1 - 3 (前書き)

お待たせいたしました。今回は少し長いのですがご了承ください。
「オリジナル主人公・人機設定」で一部変更点がありますので目を通しておいてください。

テレビではどのチャンネルも、柊神社の森が燃えていることを報道していた。赤緒も、そのニュースを見ている。

「柊神社が……！私、やつぱりいきます！！」

赤緒がいてもたってもいられず、走り出そうとすると、一人の少女が止める。

「待ちなよ、赤緒！『モリビト2号』は、まだ整備中だよ！今、出撃しても、まともに戦えない！的になるだけだよ！！」

「エルニイ……。でも、柊神社は大切な所なの！！私が守らなくちゃならないの！！」

「赤緒……。でも……」

あまりに真剣な赤緒の様子にエルニイ立花はたじろいだ。しかし、エルニイは引かない。引くわけにはいかない。

「……ダメだよ。人機が危険なものであることを赤緒もわかってるよね？モリビト2号が破壊されたら、どうなるか。予想はつくよね？」

いつもは明るいエルニイが、今はとても真剣な声で赤緒に諭す。

彼女は人機の操主であり、整備も担当している。人機の仕組みをよく理解しており同時に危険性も理解している。そんなエルニイの様子に今度は赤緒がたじろいだ。

「でも……このままじゃ……」

「大丈夫よ」

「え？」

声が聞こえた方を向くと、一人の女性が近づいてきた。

「南さん……」

南は、この事態に焦っている様子はなく、いつものサバサバした感じで赤緒に声を掛けた。

「あそこに、新しい人機があるのよ。本当はここに運んでくる予定

だったやつが」

「新しい人機……。『スサノオ』って名前だっけ？」

「ええ。……さて、それじゃ、私はちよつと出かけてくるから、二人はちゃんと待機していなさいよ」

そう言つと、南は外で待機している軍用のヘリコプターへと向かつていった。

「み、南さん！？あの、出かけるって、どこへ？」

赤緒の疑問に、南は、にっと笑つて答えた。

「新しい操主が、どんな子なのか見に行つてくるの」

*

柊神社の森は、都内では珍しい深い緑に覆われている。

透は森に近づくにつれ、焦げ臭い匂いが鼻を刺してくるのを感じていた。

「ハア、ハア……」

「ちよ、ちよつと、待つてよ……。速いつて……」

舞奈の足は速い。透はかつて剣道をしており、体を結構鍛えていたが、それでも舞奈に追いつくのがやつとだった。

二人が神社近くの散策用の小道を駆け抜ける。そこには、むつとするような熱気、土の匂い、そして、場違いな金属の塊が木々をなぎ倒していた。

「な、なんだよ、これ……！？」

「……これが。このコンテナの中にあるものが君のお父上が遺したものよ」

舞奈はすでに呼吸が整っており、いつも通りの口調になっていた。「これが……！？こんな大きなコンテナに入っているものなんて、

どう考えても危険なものじゃないじゃないか！！」

「……そう。この中にあるものは、危険物よ。でも、君の力なら大丈夫よ」

「そんな気休めを言うなよ！……父さんは、君は、僕に戦えって言うのかよ！？」

「透、私は……！」

舞奈が何かを言おうとした瞬間。

「クハハハ、見つけたぜ！！」

狂ったような笑い声が二人の耳に入ってきた。そして、二人の近くにある茂みが切り裂かれ、男が現れた。男は上半身、裸で褐色の肌をしており、体には左肩から腹部、背中、左腕に亘った刺青をしている。さらに目が行くのは、男が鎌を持っていることである。鎌は男の肩くらいの長さがあり、鎌というよりデスサイズと言ったほうがしっくりくる。

「よう、テメエらのどっちかが血統なんだろ？女のほうか？別に女のほうじゃなくてもいいけどよ。男なんかに興味ねえからな。で、どっちなんだ？」

男は二人を、特に舞奈をぎらついた眼で見ている。

「な、なんだ、あいつ？」

透は舞奈に視線を送ると、舞奈はいつのまにか拳銃を出しており、銃口を男に向けている。

「あなた、何者？」

「ハッ、銃を向けて何者って、テメエこそ何様だ？でも、いいぜ！やれるモンならやってみろよ！！」

男は叫ぶと、舞奈目掛けて走り出した。舞奈は躊躇せず発砲するが、男は避けたり、鎌で防ぐなど人間離れした動きをしていた。そして、弾が切れた。

「まさか、『強化人間』！？」

舞奈は拳銃のカートリッジを素早く換えるが、男は鎌を振り上げ「コロスッ！！」

躊躇せず振り下ろす。

「やめろーーーーーっ！！」

透が思わず叫ぶと、突然、眩しい光が舞奈の周囲を包み込む。

「な……何イ！？まさかアルファーか！？」

大鎌の切っ先が、止まっていた。あたかも、見えない壁にくい込んだかのように、舞奈の眼前で空しく制止している。

「くっ、くううっ！！」

「う……うわああああああ！！！」

「ぐああああああああああ！！ま、待てよ、オイ！！リバウンドまで！？な、何なんだよ、コイツらっ！」

強烈な力の奔流が舞奈から放たれる。舞奈は服の内側ポケットから何かを取り出した。それは、小河原両兵が持っていた不思議な金属片と同じ形、全く同じものだった。

「がはっ！！」

男は地面に叩きつけられ、不様な悲鳴をあげた。

透も、あまりの出来事に地面に座り込んだ。

「あ、ああ……な、なんだ、今の、力……」

「これが、アルファーの力……」

さすがの舞奈も、動揺していた。舞奈が握っているアルファーは今も微かに光っている。

「そ、それって、小河原両兵って人も持ってたやつ、だよな？今の光も、それが？」

「そうよ。これは、血族の人間の力によって効力が発揮されるの。でも、私は血続じゃない。ということは、あの光は君の力によるものだと考えられない？」

舞奈は、ふっ、と笑って透に尋ねた。

「僕の、力……？これが……これも、僕の力？」

舞奈の言葉に透は戦慄した。自分の力によるものと聞いて、三年前を思い出した。

（僕の力は、人を傷つけてしまうものなのか……？）

「くっ……やっぱりテメェら、血続だったのか……？まあいい、探す手間が省けたぜ」

不可思議な力に吹き飛ばされた男が、よろめきながらも起き上っ

た。

「どっちが血統なんて、どうでもいい……。テメエらまとめて殺してやらあー!!」

男は大鎌を肩に担いで、戦闘態勢に入った。男は近くにいる透に狙いをつけた。

「透、逃げて!!」

舞奈の叫びと同時に銃声が響いた。舞奈は銃で牽制しつつ、透に近づいていた。

「な、何言ってるんだよ! 渡良瀬さんも、逃げるんだよ!!」

透は舞奈に抗議するが、彼女は首を横に振った。

「無理よ。相手は強化人間。普通の人間以上の身体能力を持っているて、逃げて、すぐに捕まってしまう。私が囹になるから、君は逃げなさい」

舞奈は至って冷静だった。彼女の言う通り、男は先程から舞奈が撃つ銃弾を被弾することなく避けたり防いだりしていた。素人の自分には何もできないと、透の心は諦めと悔しさが入り混じった。舞奈も、何かしら訓練は受けているだろうが、結局は人間。ともに戦っても勝ち目はないことは理解しているはずである。それでも、彼女は逃げず、透を守ろうとしている。

「君を死なせるわけにはいかないの! 君は生きなければならないの! だから、早く逃げて!!」

そして、舞奈の言葉に疑問を超え、憤りすら感じていた。なぜ、彼女は、ここまでして彼を守ろうとしてくれているのか。なぜ、自分のことをかえりみず、戦おうとしているのか。

(こんなの……。こんなの、おかしいよ……)

透は自分に言い聞かせるかのように、心の中で囁いた。そして、無意識に叫んでいた。

「そんなことされても、ちっとも嬉しくなんかないよ!! 二人で生き残ることに意味があるんだろ!? 君の言葉は、自己犠牲による自己満足だ! そんなの、迷惑なんだよ!!」

来てみたら、これだ。……コンテナの中身は、人機か？」

「な、何か、知っているのか？このコンテナが何なのか。何がどうなってるのか！？」

「お前、なんで逃げない？」

両兵は透の疑問に答えることなく、逆に透に質問してきた。

「えっ……？」

「逃げなかった度胸は、一応褒めてやる。だが、今ので分かったはずだ。自分の無力さが。言ったよな。お前は足手まといだと」

「……っ」

「さっさと逃げろ。ここにいても、無駄死にするだけだ。あと、この女とも関わるな」

「え……ど、どうして……？」

「分かんねえか？この女に関わらなければ、お前はこんな目に遭わなかっただろうが」

「そ、そうかもしれない、けど……」

「自分を必死こいて守ってくれたから、情が移っちまったか？」

「そんなこと……」

「それによ、このコンテナがある以上、ここは戦場になる。地面にぶっ倒れている奴のようなのが、まだまだやって来やがる。この女の仲間もな」

「……お前はどうするんだよ？」

「オレは奴に用がある。分かったら、とつとと行け！」

「……僕は」

会話が一通り終わり、透がどうすべきか悩んでいると

「そうはさせるかよ……！」

額を割られた男の怒声が響いた。そして、上空から黒い影が二つ降りてきた。それは、遙か高く居るだけなのに、とてつもない大きさを感させた。

「口、ロボット……！？」

「ちっ！ロボットじゃない。ありや人機、バーゴイルだ」

「あ、あれが、人機!？」

「そうだ。あれがロストライフ現象の正体。人間を奴ら強化人間が、街を人機が破壊する」

「ど、どうしてそんな事をあんなロボットを使つてまで……」

「さあな。世界征服でもしたいんだろ。南米じゃ、もう当たり前のことだな」

「なんだつて……!？」

「やれっ!!!」

男の命令が会話に割つて入った。男の命令に二機のロボット、バーゴイルが小脇に抱えた機関銃を構え、引き金を引いた。爆音が響き渡り、土煙が盛大に舞い上がる。

「こつちだ、来い!!」

「透、行くわよ!」

「うわああ!」

三人は全力で走り、コンテナの陰に身を潜めた。

「ハッ、コンテナの陰に隠れたか。バーカ、どこに逃げても同じなんだよ!」

男の余裕の声が響き渡る。

「このコンテナ、あの銃撃に耐えられるのか? ロボットが位置を変えれば、僕たちを狙える!」

「くそ。だからとつとと、逃げてりゃよかったんだよ!」

「そんなヒマ無かったよ! それより、何とかならないの! ? このままじゃ本当にやられちゃうよ!」

銃と呼ぶには巨大な銃身から、驟雨しゅううの如き砲弾の連打を浴びるコンテナの陰で、舞奈は口を開いた。その声はこの騒音の中でも、二人にはつきり聞こえた。

「……………。『スサノオ』を起動させるわ」

「え……?」

「『スサノオ』……だと?」

二人の疑問に、舞奈は落ち着いた様子で説明を始めた。

「コンテナの中身は、『スサノオ』という新型の人機よ。この場を凌ぐには、スサノオに乗って戦うしかない。私一人でもスサノオを動かすことは出来るけど、ともに戦えない。だから。」

舞奈はそこまで言うのと、透を真剣な目で見つめ

「私と一緒に戦って」

一言だけ、そう言った。

「僕が、戦う……？」

何を言われたのか、理解出来なかった。しかし、それも一瞬だけ。すぐに言葉の意味を理解した。こんな異常な事態に巻き込まれても、頭が思ったより回転していることに内心少し驚いていた。

「ど、どうして僕なんだよ！？僕なんかよりも小河原さんにやってもらった方がいいに決まってる！強いし、度胸もあるし。それに仲間もいるんだろ！？仲間に連絡して戦ってもらえればいいじゃないか！！」

透の弱気な叫びに舞奈は首を横に振る。

「無理なのよ。スサノオは人を選ぶ人機なの。スサノオに登録されていない操主はスサノオを動かすことが出来ない。そして、スサノオに登録されているのは君と私の二人だけ。生き残るには、君の力が必要なの！」

「……イヤだよ」

舞奈の必死の願いに透は静かに拒否を示した。

「透……」

舞奈は説得の言葉をかけようとすると、透が口を開いた。

「三年前まで、僕は剣道をやってたんだ。自分で言うのも難だけど、それなりに成績を残していたんだ。ある日、道場で仲間の一人と模擬試合をしてる最中に、突然、僕の中で何かがはじけた感じがしたんだ。言葉でうまく言い表せないけど、あえて言うなら、激情っていうのかな。それを感じた瞬間、僕はその人を……叩きのめしたんだ。命に別状はなかったけど、大怪我をした。僕はすぐに剣道を捨てた。そして、争い事や試合とか、『戦う事』に関わらないって決

めたんだ。僕の力は人を傷つける。人を傷つけるくらいなら、僕なんかいない方がいい……」

透の長い告白を舞奈と両兵は静かに聞いていた。

「透、それは……」

間違ってる、舞奈がそう言おうとすると、突然、両兵が透の制服の襟を締め上げ顔を引き寄せ、吠えた。

「『僕なんかいない方がいい』だと？何ぬかしてやがる……！」

「っ！？」

「人を傷つける。だから逃げるのか？ふざけるんじゃないねえ！！被害者ヅラするのもいいけどよ、同時にテメエは加害者だ！そこんこ理解してねえだろ？」

「それくらい、僕だって分かってる！だから、同じ過ちを犯さないように……！」

「逃げるのか？」

その言葉を言った両兵の声は先程と違って静かだった。

「逃げたら、おめえの問題は解決するのか？自分にビビらず生きていけないのか？本気でそう思ってるんだったら、そうしやがれ。俺はもう何も言わねえ。だけどよ、俺は何も変わらねえと思うぜ？結局、同じことを繰り返し、またウジウジ悩むだけだ」

「……じゃあ、どうしたらいいって言うんだよ……！」

「そんなこと、俺が知るかよ。第一、これはテメエの問題だ。そんなもの、自分で終わらせろ」

そう言って、両兵は透から手を離し突き飛ばした。

「何だよ、偉そうに……！」

透が両兵に歩みよろうとすると、舞奈は透の肩を掴み自分の方に振り向かせた。

「透、よく聞きなさい」

舞奈の目はいつも以上に真剣だった。

「君の気持ちは分からないでもない。でも、彼の言う通り、逃げて何も変わらないわ。大切なのは、その力を、その自分を受け入れ

ることだと思うの。そして、自分と向き合って真剣に考えるの。力というのは、持ち主の心の持ち方で変わってくると思うわ」

「心の、持ち方……」

透の呟きに答えるかのようにうなずき、言葉を続ける。

「望んで手に入れた力でなくても、君にはその力を持つ責任がある。君が力を持っていることには必ず何か意味があるはずよ。そして、逃げずに立ち向かうの。そうすれば、自分に自信が持てるはずよ。私も手伝うから」

舞奈の言葉に、透は圧倒されていた。同時に実感もしていた。自分の器の小ささに。器が小さいことには、事件の後からずっと分かっていた。しかし、二人を前にして、それがあまりにも小さすぎることを感じずにはいられなかった。

逃げて、何も変わらない。そんなことは分かっていた。自分自身と向き合うべきだ。それも分かっている。でも、怖かった。人を傷つけるという恐怖が。取り返しのつかないことになってしまっているのではないかという恐怖が。

でも、今なら変わることができるかもしれない。自分を心配してくれる人がいる。一人では無理だけど、二人なら。

「僕は、変わることができるのか……？ 何かに、なれるのか……？」

透のささやきは、しかし、銃火という現実にはたやすく消されてしまう。バーゴイルのマシンガンが三人の近くに着弾した。地面が爆裂し、土砂が舞い上がる。

「おおーい、かくれんぼは、もう終わりにしよーぜ」

圧倒的な優位に立った男の笑みを含んだ下卑な声が耳に入ってきた。

「くそ……」

さすがの両兵も危機感を隠せないでいた。すると、透が顔を上げて叫んだ。

「僕は……、僕は、変わりたい」

「透……？」

「僕の方が何なのか、僕に出来ることは何なのか、それを知りたい。もう……逃げたくないんだ!」

透が心の叫びを上げると、舞奈が持っているアルファが一瞬、光を放った。その直後、

コンテナから音が響いた。三人がコンテナに目を向けると、いつの間にか開いていた。

「開いてる……。一体どうして……?」

「スサノオが呼んでいるのよ……。透、君はどうする?」

舞奈が透に訊いてきた。質問の意味を透は分かっていた。

「これに乗れば、僕は変わるのか……?」

「君に覚悟があれば、スサノオは君に答えてくれる」

舞奈の答えに、透はしばらく考え、そして。

「やってみよう。僕に出来ることを」

そう答え、透と舞奈はコンテナの中へ入って行った。

1 - 3 (後書き)

感想・指摘・声援お待ちしております。

1 - 4 (前書き)

お待たせいたしました。いよいよ、初戦闘です。

コンテナの中は、かすかに日差しが差し込んでいただけで、薄暗かった。日差しは、倒れ伏している巨像を照らしている。その大きさに、透は全容が掴めなかった。しかし、この巨像が人の形をしていることだけは分かった。

「お、大きい……」

あまりの迫力に思わず、言葉が漏れてしまう。

巨像は全体的に白色が目立ち、細い部分――関節に位置する所――には黒色がある。また、所々に赤色があることも目に入る。

「これが、『スサノオ』……。父さんが、遺したもの……」

「急ぐわよ、透！」

「う、うん……」

巨像の上に立っている舞奈に促されて、透も巨像の上に跳び移った。舞奈に近づいてみると、そこには不自然に緑色をしている所があった。すると、突然、緑色の部分が二人を迎え入れるかのよう、上下に開いた。中には座席が二つ、前後に分かれていた。前の座席には操縦桿そうじゅうかんのようなものが左右に一つずつある。後部座席には、縦桿はなく、代わりにコンピュータのキーボードのようなものが左右にある。

「これって、コクピット？」

「そうよ。君は前に乗って、私は後ろに乗るわ」

こうして、二人は機体に取り込んだ。知られざる数奇な因縁と力に彩られた人機に。

透は薄々感じていた。気分が高揚していることに。戦う恐怖よりも未知なる体験をするという期待感が高まっていることに。

男の我慢は限界を超えようとしていた。三人を誘き出すためにコンテナ周辺に銃撃を降らせているが、姿を見せることはなかった。

「出てこねえつもりだな。かまうもんか、プレッシャーガン用意！」

男の号令を聞いて、バーゴイルはマシンガンをしまい、腰に装備されている大型のブレードを手に持った。ブレードの刃先がコンテナに向けられると刃が上下に分かれて開き、中から巨大な砲口が出てきた。それを見た両兵の顔が青ざめていく。

「プレッシャーガン！？こんな近くでレーザー砲を撃たれたら、コンテナも生身の俺もヤベエ！！」

両兵はとつさに走ってコンテナから離れようとするが、男は両兵を無視し、叫んだ。

「発射あー！！」

男の叫びと同時に、砲口から閃光が放たれた。閃光はコンテナに直撃し、周囲は光に包まれる。

「くっ！」

両兵はコンテナから離れており、蒸発されることはなかったが、光に飲み込まれていた。光が収束すると、コンテナがあつた場所から黒煙が立ち上り、周囲は炎に包まれていた。

「ハハハ、アハハハハッ、ハーハハハハハハッ」

男の狂った笑い声が響き渡る。

「ハハ……」

しかし、男の笑い声は「それ」を見ると冷めていった。

「は……」

そして、男は黙ってしまった。

立ち上る黒煙の中から、「それ」は姿を見せた。表面は白く、裏側は黒い二足の脚。白色の中に緑色の円が目立つ胴体。白と黒の二色に赤色が入り、尖っている肩。そこから伸びる腕と尖った手。左腕には赤と黒の二色の小型の盾が装備されており、その腕下には赤色をした刀の鞘が付いている。鞘の先端は肩の高さまであり、納まっているのは太刀であることが想像できる。そして、緑色に光る鋭

い両目、顎のように見えるフェイスガードらしきもの、さらに赤色の額部から左右に一つずつ伸びたアンテナ。どこか凶暴さを感じさせる顔にはアンテナが角のように見え、その巨像はまるで「鬼」と表現することもできそうだった。

「……ほう」

両兵が感心したような声を漏らす。

「な……なんだ、ありや。あれも、人機なのか……？ あんなの見たことねえぞ！？」

*

「スサノオ、起動完了！」

舞奈は後部座席に座っており、左右のキーボードをそれぞれ片手で同時に操作している。

「頑丈だなあ……。今の攻撃でも、ほとんど無傷だ」

前の座席に座っている透は、操縦桿を握りしめ、目の前にあるモニターの一つを見ながら呟いた。

「そうね。でも、油断してはダメよ。相手は戦闘になれているから。それから操縦の仕方は、さっき手短に説明しちゃったけど、大丈夫？」

「……正直、大丈夫じゃないよ。やっぱり、いきなり戦闘だなんて無理だよ……」

「大丈夫よ。スサノオの制御は私がやるから、君は相手から目を離さず、相手を倒すだけでいい」

「でも……」

どうしても弱気になってしまう透に、舞奈はやさしく声をかける。「今は信じて。私を、スサノオを、そして自分自身を」

「……わかった。やってみるよ。あいつらをこのままにしておくわけにはいかないから」

舞奈の言葉に、透は少し緊張がほぐれたことに気付いた。そして、

彼女の声にどこか懐かしさのようなものも感じていたが、戦闘という現実が、その感覚を吹き飛ばしてしまう。

「なんだ、アイツ……。モリビトタイプとは形が違うし、他のタイプより性能が良すぎる」

男は独り言を言っていたが、すぐに考えることを放棄した。

「よおし、あの機体、オレが貰う。各機、接近戦で攻める！狙いは、胴体の緑色の部分だ！！」

男の命令で、バーゴイルが持っているブレードの刃が閉じ、接近戦の態勢になる。

透の目の前にあるモニターの一つに日本語が浮かび上がった。目を通してみると、内容は敵の情報だった。

「『バーゴイル』。敵の量産型で、無人機なのか」

「透、準備はいい？攻めるわよ！」

「あ、ああ……！」

二機のバーゴイルが、男の命令に忠実に従い前に出てくる。透は前に出てきた一機に、スサノオを突進させる。鋼の腕を振り上げ、渾身の勢いでストレートを放った。

「うおおおおおっ！！」

しかし、何の捻りもないただのストレートは簡単に避けられてしまう。しかも、やや勢いを付けているため、すぐに止まることができない。さらに体重も前にかかっているので、転倒しそうにもなる。

「う、うわああああ、転ぶ！！」

「勢いを付けすぎよ！」

舞奈が必死に制御したおかげで、転倒というみっともない事態は回避された。

「と、止まった……。っ！！」

安堵したのも束の間、突如、アラームが鳴り響いた。

「うしろからよー！！」

舞奈が指示した直後、機体が大きく揺れた。敵の横薙ぎの一撃が、背中当たる。体を後ろにいる敵に向けようと方向転換するが、攻

撃の手が緩むことはなかった。

「ぐっ、くうっ！」

「透、盾を構えて！きやつ……！」

「わ、わかった！」

透は左腕を挙げさせ、小型の盾を構えた。装甲の厚さもあり、ダメージを軽減させているが、少しずつ蓄積されている。

「反応が鈍い。整備不足ね……。透、一度下がって、体勢を立て直すわよ！」

「ああ！」

透はペダルを軽く踏み、背部と脚にあるエンジンバーニアを軽く噴かせる。スサノオは地面を滑るようにしながら後退していく。

「ハア……ハア……」

「透、止まって！これ以上、下がったら、柊神社に被害が出る！」

「わかった！でも、どうするんだよ！？このままじゃ……」

「『叢雲』を使うわ」

「『叢雲』……？何、それ？」

「スサノオに装備されている武器よ。左腕に刀が装備されているでしょ？その刀が『叢雲』よ」

モニターの一つを見てみると、スサノオの武器のリストのようなものが表示されている。リストと言っても、表示されている文字は『叢雲』の一つだけだった。

「コイツの武器って、刀一本だけなのか！？」

「まだ完全に整備し終えていないのよ。今はこの刀で乗り切るしかない！」

「……ムチャクチャだ。こんなの……」

愚痴を言いながらも、透は鞘から刀を抜かせた。刃は長く、どちらかと言うと太刀と表現した方が正しく感じた。

「でも、刀を持たせたからって、当たらなきゃ意味がないよ」

「でも君、剣道をやっていたのよね？」

「やってたけど、もう三年も経ったんだ！それに、実際にやるのと

ロボットでやるのと同じや全然違うよ！それくらい分かるだろ！？」

「分かってるわよ。でも、君ならできると私は信じている。言ったでしょ？君に覚悟があるなら、スサノオは答えてくれるって」

「だからって……」

二人の口論を絶好の機会と見て取ったのか、一機がブレードをかざして地面を蹴り、突進してきた。

「っ！！正面から来るわ！」

「……！！」

バーゴイルは透が避けようとしても避けきれない所まで接近していた。

（やられる……）

本能が死を直感した。しかし同時に、生きる、という本能が体を支配していった。すると、時間の流れを敏感に感じるようになった。目前に迫ったバーゴイルの動きがスロー再生されているかのようにゆっくりと感じた。手が自然に動いた。

「えっ……！？」

舞奈は透がとった行動に驚愕していた。

スサノオの左手がバーゴイルのブレードを受け止めていた。いわゆる、片手での真剣白刃取りだった。

「でやああああああっっっ！！！！」

透は気合いの雄叫びを上げる。スサノオの右腕を振り上げ、バーゴイル目掛けて叢雲を振り下ろす。

一刀両断。言葉通り、バーゴイルの上半身と下半身が切り離され、爆散した。

「……………」

両兵は、口を開くことなく、静かにスサノオを見上げていた。

「な、なんだよ、アイツ。あんなマネしやがるとは……」

男もこの事態に、慌て始める。

「ハア……ハア……」

息が上がっていた。ほんの数秒の出来事のはずなのに、透には長

く感じた。

「すごいわ、透！あんな技を使うなんて、正直、すごく驚いたわ」
舞奈が称賛の言葉をかけるが、今の透の耳にはあまり入ってこなかった。

「た、倒した……のか？僕が……」

「そうよ。でも、あと一機残っている。がんばりましょう」

「ちょ、ちょっと待って……。まだ、呼吸が……」

弱音を吐きつつも、奇襲に備えて機体を生き残っているバーゴイルに向かせる。しかし、バーゴイルは攻めてこず、スサノオに怯えたかのように宙へ飛び上がった。

「あ、あいつ……逃げるのか？」

「透っ！あのバーゴイル、街の方へ向かうつもりよ！止めるわよ！」

「止めるって、どうやって！？」

「脚にバーニアがあるでしょ？これを使って跳ぶの！」

舞奈がキーボードで入力すると、脚部の装甲が開き、ノズルがせり出した。スサノオの両脚を開き、姿勢を少し低くさせると、圧縮された燃焼ガスが力強く噴射された。

「と、跳ぶって……！」

「スサノオは空を飛ぶことは出来ないけど、跳び上がるくらいなら出来るわ！あれに跳び付くのよ！」

「ちょっと待っ、うわあああああああ！？」

飛び去る敵に向かって、地面を蹴るスサノオ。両脚の推進器が咆哮し、弾丸のように機体が跳ぶ。体験したことのない強烈な加速度に、全身がシートに押し付けられる。スサノオはバーゴイルと同じ高さまで到達するが、透がペダルから足を離すのが遅れてしまい、バーゴイルより高く跳んでしまう。

「と、透！高く跳びすぎよ！」

「ご、ごめん……！だったら、このまま……！！」

透は地面に向かって、バーニアを噴かせる。そして、最初に破壊

したバーゴイルと同様、太刀を振り下ろした。

「でやあああああつっ！！！」

再び一刀両断。バーゴイルは空中で二つに分断され、スサノオが勢いよく地面に着地すると同時に、空中で爆散した。

「マ、マジかよ……」

男は茫然とした。

「……………あいつら、やるじゃねえか」

両兵は、どこか嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「……………ハア。ハア……………ハア……………」

「……………」

透は息を切らせていた。さすがの舞奈も言葉がすぐに出てこなかった。

「僕は……………。僕は……………」

敵とは言え、命が懸かっていたとは言え、再び暴力を振るってしまった事への罪の意識なのか。そんな言葉が漏れた。操縦桿を握る手がまだ震えている。

「よくやったわ。君は本当によくやってくれたわ」

舞奈が労いの言葉を透にかけた。

その時、頭上で、一筋の光と甲高い音が切り裂いた。

1 - 4 (後書き)

戦闘シーンを文章で表現することがいかに大変かを実感しました。
アドバイスがあれば、ぜひ教えてください。
いつも通り、感想・指摘・声援お待ちしております。

1 - 5 (前書き)

お待たせいたしました。今回で第一話完結です。

コクピットの中では、警報が鳴り響いていた。何かがスサノオに接近していた。

「透、上からよ!」

「て、敵!？」

天を振り仰いでみると、何かが上空から降りてきて、スサノオから少し離れた所に着地した。

それは、人の形をしていた。全身は白銀に輝き、ボディには所々にマゼンタが施されており、両目もマゼンタと同じ赤く鋭く光っている。最大の特徴は、背部に備わっている両翼である。先端に向かうほど鋭くなっており、刃のようである。翼も白銀に輝いており、その機体は美しさを感じさせ、どこか凶悪さをも感じされる。

白銀の機体は両翼を閉じ、スサノオを鋭く見据えている。

「『シュナイガー……トウジャ』?」

透がモニターの一つに目を向けると、『シュナイガー トウジャ』と表示されていた。機体名の下には、その機体の情報が簡潔に表示されていた。

「行方不明の試作機……って、どういうこと? 敵なのか?」

透は混乱しているが、一方の舞奈は、少し驚いた顔をしている。

「あの人機は、確か……」

「え? 知ってるの? それに今、人機って……」

透は舞奈に問いただそうとすると、無線機のランプが明滅した。「気になるかもしれないけど、今はこの状況を何とか切り抜けるわよ。相手が私たちと話をしたがっているけど、どうする?」

「……。とりあえず話してみよう。いきなり襲ってこないということとは、そこまで僕たちに敵意があるわけじゃない……と思うから」

透の少し自信が無さそうな意見に、舞奈は、くすつ、と笑みをこぼし、通信をつないだ。

モニターの一部に、人の顔が映し出された。首から上までしか映っていないが、その人物は若い女性だった。美しい金色の髪に洗練された顔立ち。サングラスを掛けているが、色は薄く、二人には女性の目が見えている。鋭い眼差しで睨みつけているが、その睨みも磨きかかっており、透はその眼差しが美しくも見えた。

「……貴様は誰だ！」

しかし、透が抱いた感情を壊すような鋭い声によって、いやでもここが戦場という現実に戻されてしまう。

「そ、そっちこそ、誰だよ……？」

声が震えていた。やっと戦闘が終わったというところだったのに、また戦うという憂鬱。しかも、次は無人機ではなく人が乗っている。無人機なら手加減することなく戦えるが、人が乗っていると、その人を殺してしまうかもしれない、という恐怖も湧いてくる。その前に、自分たちが殺されてしまうかもしれないが。

「若い男と……女……その人機は複座式か。コレは……貴様らがやったのか!？」

女性は鬼気迫る顔で尋ねてきた。そこに殺気もあることに透は感じた。背中に嫌な汗が流れ落ちる。

「そ、そうだよ。それより、おまえは誰なんだよ……？」

透の質問に女性は、僅かに目を見開いた。そして、シュナイガートウジャの細い脚が、近くに転がっていたバーゴイルの頭を踏み碎いた。

「貴様が質問する権利はない。私が言う事はただ一つ。八将陣は私の獲物だ。一匹たりとも逃さない。ジャマするやつも……」

女性がそこまで言った、その瞬間、シュナイガートウジャの姿が消えた。

「えっ!？」

透が驚いた声を出したのも束の間、画面いっぱいシュナイガートウジャの顔が映っていた。

「同じだ!!!」

そして、スサノオが大きく揺れた。

「うわああああ!!」

「くっ、一瞬で近づいてきたの!?!」

シュナイガートウジャに殴られ、後ろに倒れそうになるが、舞奈がとつさに制御して踏み止まり、シュナイガートウジャとの距離をとる。

「サポートの腕はいいようだが、操主は素人だな!だが、容赦はない!!」

女性はそう言うと、シュナイガートウジャの両手に拳銃を持たせる。そして、引き金を引き、拳銃が火を噴いた。

「ぐわあああああつつつ!!!!」

「くうううつつ!!」

シュナイガートウジャのハンドガンはバーゴイルのよりも小型である。しかし、威力と連射速度はそれよりも互角以上のものだ。コクピットを守ろうと、スサノオの両腕を胸の前で交差させ、攻撃を凌ごうとする。小型の盾を構えているので、腕の損傷は軽微だが、盾に守られていない部分―主に肩や腹部、脚部―の装甲は少しずつ削られていた。

「ど、どうするんだよっ……!このままじゃ、やられる……!!」

透は舞奈に訊くが、舞奈はすでに何かを入力していた。

「ほんの一時的だけど、『リバウンドフォール』を使うわ!!」

「リ、『リバウンドフォール』?」

透がモニターの一部を見てみると、スサノオの左腕―小型の盾―にエネルギーが送られていた。

「盾にエネルギーを送り込んで、特殊なバリアを発生させる。このバリアはあらゆる物理攻撃をはね返すことが出来るの。でも、本来のリバウンドフォールは、このやり方で発生させるものじゃない。

今は、無理矢理エネルギーを送り込んでいるの。長時間使用すれば、機体が爆発してしまうかもしれない!!」

「そ、そんな……!!」

舞奈の解説に透は反対しようとするが、透の言葉を遮るかのよう
に、舞奈は続けて言う。

「でもこのままじゃ、確実にやられるわ！こんなところで死にたく
ないでしょ？」

「それは、そうだけど……」

「別守りに集中するわけじゃないわ。リバウンドフォールを出し
ながら、相手に近づいて攻めるの。効率が悪いかもしれないけど、
今はこの作戦でいくしかない！！」

舞奈の作戦に、透は逡巡^{しゅんじゆん}する。しかし、考えている間にも、スサ
ノオの装甲は削られていく。盾と言えども、ダメージを受け続けれ
ば破壊されてしまう。そして、透は覚悟を決めた。

「……わかったよ。攻撃は最大の防御とも言うし、やってみるよ！」
「それでこそ、男の子だね。……いくわよ！！」

舞奈はリバウンド発生器の起動スイッチをオンにして、叫んだ。

「リバウンドフォール、展開！！」

すると、小型の盾が展開した。そこから薄い青色をした光の粒子
が発生し、スサノオを包み込むかのように拡がった。シュナイガー
トウジャの銃弾は光の粒子に阻まれ、はね返される。

「何っ！？リバウンドフォールを張れるのか！」

女性が動揺したのを見て、透は攻めようとするが、突然アラーム
が鳴り響いた。

「エネルギーの残量が少ない。リバウンドフォールが解除されるわ
！」

舞奈が叫ぶと光の粒子が消えてしまい、展開していた盾は閉じて、
元の形に戻ってしまう。さらに新たな緊急事態が発生した。

リバウンドフォールではね返された銃弾のいくつか、家やマン
ションが並ぶ住宅街へと跳んでしまっていたのである。

「あつ……街が……！！」

銃弾を撃ち落とすにも、スサノオには射撃武器が装備されてい
ない。街へ向かうにも、到着する前に被害が出てしまう。透が慌て

ている横で、予想外の事が起こった。

「……っ!!」

シュナイガートウジャが街に跳んで行った流れ弾を撃ち落とした。ハンドガンで流れ弾を撃ち落とす射撃の腕にも驚いたが、それよりも女性の行為が街を守ろうとしたことに驚いた。

「流れ弾を……自分で、撃ち落とした?」

透はモニターで女性の顔を見た。

「……………チッ!」

女性は忌々しげに舌打ちをした。

「街を……助けてくれたのか?」

透は茫然とした声で女性に尋ねた。

「……………興醒めだな」

女性は一言そう言っ、飛び出そうとすると。

「ん?」

シュナイガートウジャはあらぬ方向を見た。透もその視線を追うと、戦車がこちらに向かってきていた。しかも、一台だけではなく十数台も。さらに上空には軍用のヘリコプターが一台飛んでいた。

「戦車が……あんなにも!」

透が驚いていると、突然無線機から怒鳴り声が入ってきた。

「その二機、直ちに戦闘を終了しなさい!これ以上は、黙っちゃいないわよ!」

声は女性だった。しかも、まだ若さを感じさせる、はつきりとした声だった。

「ぼ、僕たちも……!」

透は無線機を通して、女性に訊いた。

「そうよ。……それから、舞奈!アンタも乗っているんでしょ!操主の子と一緒に降りてきなさい。きつちりと話を聞かせてもらうわよ!」

女性が舞奈の名前を呼んだことに驚いた透は、思わず振り返った。「あの人は、私の上司。悪い人じゃないし、話もよく分かってくれ

る人だから大丈夫よ」

舞奈は苦笑しながら答えるが、透は不安を拭い去ることができなかった。

「ちっ、運のいいやつらだ……」

シュナイガートウジャの操主の呟きが聞こえて、そちらを振り向くと、銃を下ろしていた。そして、二人を睨みつけて、冷酷に告げる。

「次にあった時は容赦しない。覚えておけ!!」

白銀の翼を広げると、シュナイガートウジャは飛び去っていった。空へと舞い上がる銀光を、透と舞奈は静かに見送った。

ふと、気が付くと、透の両手は震えていた。とりあえず助かったことへの安堵、初めての戦い、底知れぬ強敵がいることへの恐怖、そして、この巨大な人機に触れてしまったことへの畏れと妙な解放感。それらの感情がゆっくりと全身を満たしていくのを透は感じた。深呼吸をして、気持ちを落ち着かせる。

「さっさと降りてきなさい!この黄坂南が、安全を保障してあげるから!」

軍用ヘリコプターが着陸すると、中から人が降りてきた。長い黒髪の女性が二人を見上げながら、手招きをしていた。

「これから、どうなるんだよ……」

「大丈夫よ。事情は私が説明するから、君は訊かれたことを正直に答えればいいわ。分からなければ、私が答えるから」

心配する透に、舞奈は元気づける言葉をかける。

「そうだ、透」

「ん、何……?」

透がコクピットハッチを開こうとしたところを舞奈が声をかけてきて、振り返る。

「今日は、本当にありがとう。お疲れ様」

「う、うん……。お疲れ様……」

舞奈の柔らかい笑みを見て、透は内心ドキドキしてしまい、ぶっ

きらばうに答えてしまった。

夕日によってスサノオは燃えているかのように赤く染まっている。

*

日が沈み、辺りが暗くなっていた。柊神社からやや離れた人氣のない道路に、一人の男がいた。透たちを襲った鎌を持つ男である。

男は息を切らして、壁に寄り掛かっていた。

「ハア……ハア……。……くそっ、オレとしたことがなんてザマだ！」

男は戦車が向かってきたのを見て、一目散に神社を後にしてきた。途中まで小河原両兵に追われていたが、強化人間の身体能力を全力で活かして振り切ることができた。

「しかし、あの人機は一体何だったんだ？見たことがねえタイプだったし。そもそも、あれは人機なのか？」

男が呟いていると、誰かが男に近づいてきた。

「カリス！カリス・ノウマン！」

「うっ！」

声は女性だった。凜とした声に男、カリスは緊張した顔で振り返った。

「たった一機の人機、しかも素人相手にここまで手こずるとは……。八将陣の名折れだな」

「くっ！」

女性の言葉に、カリスは苦虫を噛み潰したような顔をして女性を睨みつけた。

女性は不敵な笑みを浮かべていた。

1 - 5 (後書き)

次回から第二話が始まります。お楽しみに。
感想・指摘・声援お待ちしております。

2 - 1 (前書き)

あけましておめでとうございます。

12月に始めたばかりですが、今年もよろしく願います。
それでは、お待たせいたしました。第2章のスタートです。

「はあ……」

星湘高校へ向かう通学路で、透は盛大なため息をついた。

昨日のスサノオでの戦闘後、透は戦闘に割って入った女性「黄坂南」から尋問を受けたのである。南は軍人とは思えないほど、気軽に話しかけてきて、透は、呆氣にとられた。舞奈に言われた通り、自分で答えることは答え、分からないことは舞奈が答えていた。終わってみると、すでに日付が変わっていた。そして、帰ろうとしたところで、南は一言、言ったのである。

「今回のことは誰にも言っちゃダメよ。言ったらどうなるか、だいたい分かっているわよね？」

この一言を聞いて、この出来事がいかに重大なのかを透は実感した。

舞奈とは、その場で別れ、まっすぐにアパートへ帰宅した。帰宅後、すぐにベッドに潜ったが、目が冴えてしまっており、寝付くことができなかったのである。

「散々な一日だったな……」

朝のニュースでは、どのチャンネルでも、昨日の戦闘のことが取り上げられていた。人機のことばかり言っており、透のことについては触れていなかった。どこかのニュースではパイロットのことを言っていたが、結局は詳細不明ということで、深く追求はされなかった。透は自分がスサノオのパイロット——正確には、操主——ということが知られていないことに、ほっ、としていた。圧力などがかけられているかもしれない、とも考えたが。今朝のニュースと通学途中で目に入った柊神社の森とその周囲の惨状。まだ全身に残っている疲労感と緊張感とで、朝から気分が良くなかった。

「これで終わり……なら、いいんだけどな」

重い足取りで透は、星湘高校へと向かっていった。

教室に入り、席に着くと、クラスメイトが二人―赤緒と勝世―が透に近づいてきた。

「と、と、透君！大丈夫！？怪我はしてない！？」

赤緒は慌てた顔をして、透に迫ってきた。透は勝世に、これはどういうこと、と聞くかのように目を向ける。勝世は、肩をすくめていた。

「おまえが、柊神社にいるんじゃないかって、赤緒ちゃん心配してたんだよ」

勝世の言葉に、透に緊張が走る。

「ど、どうしてそう思ったの？」

スサノオに乗るところを見られてしまったのか、と思っていたが、「だ、だって透君、たまに柊神社にお手伝いしに行ってるんでしょ？もしかしたら、いるんじゃないかって……。あの白いじ……じやなくて、ロボットに襲われてるんじゃないかって。メールしても返事がないから心配だったんだよ？」

スサノオの操主だと気付かれていないことに、透は内心安堵した。「ご、ごめん、心配かけて……。でも、僕は大丈夫だから。昨日は神社に行つてないし」

自分が心配されていよことの嬉しさと、嘘を吐いた罪悪感で、透は何とも言えない顔になっていた。

「そっかあ……。よかった」

赤緒も、ほっとした顔になった。その顔を見て、さらに罪悪感が増してしまう。いっそのこと、「僕はあの白い人機というロボットのパイロットです」と言ったら、スッキリするだろうが、南から固く釘を刺されている。それに言ったところで、あまりにも現実離れた発言で、二人とも信じはしないだろう。

そんなことを深く考え、黙っている時間が長かったのか、勝世が

声をかけていることに、しばらく気付かなかった。

「おい。大丈夫か？何度も声をかけてるのに反応がねえぞ？」

「あ、だ、大丈夫だって言ってるだろ？ちよつと寝不足なんだよ……」

これは嘘ではなかった。そんな会話をしていると、担任の教師が入ってきて、ホームルームが始まった。

＊

薄闇に包まれた空間。そこに集うは禍々しき影。

彼らを表す名前は一つ、それは「八将陣」。

幹部クラスの間が集まった広間は、異様なプレッシャーに包まれていた。その気配は穏やかなものではない。

「ほう。確かにこれは、見たことのない人機だな」

一人の女性が、モニターを見ながら呟いた。そこには、昨日のサノオの戦闘の様子が流されていた。

「だから言っただろ、あの人機は強えって！」

刺青の男―カリス・ノウマン―は、女性を睨みつけて言った。しかし、女性はカリスの視線など受け流すかのように、一瞬だけカリスの目を見て、すぐにモニターに目を向ける。

「だが、戦い方が雑すぎる。操主は素人だろ？」

そう言つと、細くした目をカリスに向け、口を少し吊り上げる。

まるで、「おまえは、八将陣のくせに素人相手に負けた」と言っているかのような口ぶり。見下された視線を向けられ、カリスは「チツ……」と舌打ちをして、さらに鋭く睨みつける。

「だげど、本当にこの人機は何だい？あたしには人機に見えないんだけど……」

「ああ。それに、妙な鬼気も感じる……。それに、あの形相……まるで、鬼だな」

先程とは別の女性と男が口を開く。女性は魅力的で妙齡な大人の

女性、その女性の隣に立つ男は大柄で、鍛えられた体には、いくつもの傷があり、歴戦の戦士を感じさせる。

「して、あの鬼をどうするつもりじゃ？破壊するにも、ちと厄介じゃぞ？」

大柄の男の隣にいる老人が、ゆっくりと口を開く。老人は小柄だが、肌は薄い灰色をしておりカエルを髭髯ほっふつさせるひしゃげた面相をしている。眼鏡をかけており、中国の道士風の服装と帽子をしている。

「そうだな。私としては、こちら側のものにしたいところだが……」
「だったらよ、もう一度オレにやらせてくれないか？」

思案している女性に向かって、カリスが口を開いた。

「あの時は油断しちまったけどよ、今度は本気でやってやる。それに、やられっぱなしじゃ、オレの気が済まねえ……」

前回の戦闘での屈辱を思い出しているのか、カリスの目が口を開くたびに、癡猛になっていく。

「いいだろう。だが、そうだな。今度はスサノオのデータを集めてきてもらおうか。もっとも、持ってくる方が私としては嬉しいがな」
女性は笑みを浮かべてカリスに指示を出した。

*

一日の講義が終わり、透は一人、屋上にいた。ベンチで仰向けになり、携帯電話をいじっていた。

「何の変哲もない一日だったな……」

ふう、と一息ついて、透は携帯電話をポケットに入れ、静かに目を閉じた。

「ま、ある意味、平和だったけど」

学校の外では人機のこと、いろいろ騒いでいたが、学内では担任の先生がホームルームで注意をうながしていただけ、あとはいつもと変わらない退屈な講義を受けた。

目を閉じて数分くらい経ってから、出入り口の扉が開く音が透の耳に入った。足音が近づいてくるのを感じたが、透はあえて聞こえないふりをした。

「ここにいたのね」

聞き覚えのある女性の声を聞いて目を開けると、舞奈がベンチの前に立っていた。

「……君か」

透は目線を逸らして起き上る。舞奈が「隣、いい？」と聞いてきて、透が「どうぞ」と無愛想に答えると、ベンチに腰をかけた。

「屋上に何か用があるんじゃないですか？」

透が不機嫌な声で舞奈に聞くと、舞奈は苦笑を浮かべた。

「用があるというか、君を捜していたのよ。教室に行ってもいなかったから、君のクラスの男の子に聞いたら、屋上にいるんじゃないかって言ったから来たのよ」

舞奈の説明に透は「そうですか」と答えるだけで、会話をしようとはしなかった。沈黙が屋上の空気を支配していく。

しかし、その沈黙を破ったのは、透だった。

「僕に何か用ですか？」

透が自分から話しかけてきたことに、舞奈は少し驚いたが、すぐに答えた。

「昨日の戦闘の後、大丈夫かなって心配したのよ」

「それなら、大丈夫ですよ。僕はいつも通りだから」

「そう……ね」

透が心をあまり開いてくれないことに、舞奈は内心寂しく感じた。再び沈黙が続いてしまう。今度は舞奈が沈黙を破った。

「ごめんなさい……。いきなり、こんなことに巻き込んでしまって

……」

「……」

突然の謝罪に、透はとっさに言葉が出なかった。

「ちゃんとした説明もなしに、いきなり戦って、って言われたら理

不尽だと思いかもしれない。言い訳になってしまっけど、あの時は君しかいなかったの」

舞奈はベンチから立ち上がり「ごめんなさい」と透に頭を下げた。透は何も言わなかったが、しばらくすると口を開いた。

「いいよ、もう……」

激昂すると思っていた舞奈は、思わず顔を上げた。しかし、透は視線を合わせようとせず、顔を逸らして俯いていた。

「だけど、これ以上、僕を巻き込まないでよ」

透ははつきりと口に出して言った。戦いに対する拒絶の意思を。

「それは……できないわ」

舞奈の返事に、透は顔を上げ叫んだ。

「どうして！？君には仲間がいるんだろっ！君の仲間にもあの口ボツトに乗れる人がいるんだろ！？だったら、その人たちで戦えばいいじゃないか！！僕がわざわざ戦う必要はないだろ！？」

「……………」

舞奈は、口を閉じていたが、しばらくして静かに語り始めた。

「……確かに、君の言う通り、私の仲間到人機を操縦できる人たちがいるわ。でも、その人たちだけで、この戦いを終わらせることはつきり言って無理よ。敵はとても強大なの。昨日会ったあの刺青の男は敵のリーダーの一人よ。それにリーダー格は自分の人機を持っている。一機で街を一つ破壊し尽くすことができるほど強力な人機を。そしてリーダーは何人かおり、彼らは『八将陣』と言われている。彼らの目的は分からないけど、阻止しなければ、たくさんの人が死んでしまうことは確かよ」

「……………」

舞奈の説明は、透にはあまりにも現実離れしすぎており、理解し難いものだった。わかったことは、敵を倒さなければ人がたくさん死ぬということだけだった。

「でも、スサノオがあれば、敵の計画を阻止できる可能性があるの。スサノオは、通常の人機とは明らかに異なる性能を持っている。そ

の性能が何なのか、まだ解明されていないけど、十分に戦うことができる」

「だからって、別に僕が乗らなくたって……」

「君が乗った時、スサノオの動力が安定した。万全とは言えなかったけど、少なくとも私一人だけで乗った時よりは良くなった。スサノオを動かすには君が必要な」

「でも……、どうして僕なんだよ？スサノオは父さんが遺したものだって言ってたけど、それって僕に戦えっていうことだろ！？何考えてるんだよ、父さんは！！」

透の口から自然と父への恨みの言葉が漏れる。

「僕や母さんのことより、仕事を優先して……。母さんが病気で寝たきりになってもお見舞いの一つもなくて、死んだ時も顔を見せなくて……。今度は自分が死んだら、訳の分からないロボットを造って、それを僕に乗れて、ふざけるなよ！！」

独り言のつもりだったが、傍から見れば、舞奈に八つ当たりしているように見える。舞奈は何も言わず、透の叫びをしっかりと聞いていた。そして、透の叫びが終わると、舞奈は静かに口を開いた。

「君の気持ちもわかる。でも、君の父上は君のことをとても心配していたわ」

「……どうして、そんなこと言えるんだよ？」

透の声は、普段の彼らしからぬ低い声だった。そこには怒りも感じられる。しかし、舞奈は臆することなく言葉を続ける。

「私はね、君の父上の元で働いていたの」

「父さんの……」

「君の父上は、確かに仕事熱心な人だった。でも、よく家庭の事も話してくれたわ。奥様や君に会いたがっていた。奥様が亡くなった時は、お見舞いやお葬式に出られなかったことを、とても後悔していた。それから、君の父上は誓ったの。奥様を守れなかったけど、せめて息子の君だけは守ろうと。その思いで造り上げたのが、スサノオなの。スサノオは人を、そして君を守るために造り上げた最強

の人機。父上は奥様や君のことを見捨てたりはしていない。誰よりも君のことを考えていたのよ」

「父さんが、僕を……」

舞奈の言葉を聞いて、透は胸が熱くなるのを感じた。滅多に家に帰ってこなかった父親が、家庭のことを、母と自分のことを心配してくれていたことが素直に嬉しかった。

突然、爆発音が耳に入ってきた。

「な、なんだ、今の爆発？」

「透、あそこ！」

舞奈が指さす方向を見ると、海岸近くの工場から黒煙が上がっていた。その上空で数機のバーゴイルが工場を攻撃していた。

2 - 1 (後書き)

やや場面転換が多くて読みにくいかもしれません。
それにおそらく、次で第2章は終わるかもしれません。
感想・指摘・応援お待ちしております。

2・2（前書き）

2部で終わらせるのは、つまらないと思ったので、少し話を延ばしました。

それでは続きをお楽しみください。

終神社を後にした南は携帯電話を使って電話を掛けていた。本当なら、今頃、透と会ってスサノオのことなどについて詳しく説明するつもりだったのだが、敵の襲撃という、予想外の事態で話は無しになってしまった。

「何？今こっちは忙しいんだけど」

開口一番、嫌味を言われてしまった。南が電話を掛けた相手は黄坂ルイ―南の養女―である。

「それくらい分かっているわよ！それよりも、状況は？」

「バーゴイルが6機確認されたわ。あと、色違いの機体が1機いるから、八将陣自ら攻めてきているんじゃないかしら？」

ルイは至って冷静に現状を南に報告した。報告を聞いた南も落ち着いていた。

「そう……。『モリビト2号』は出せそう？」

南の言葉を聞いたルイが、静かにため息を突いたのが電話越しから聞こえた。

「赤緒はとつくに乗り込んで、早く出せってうるさいのよ……。そんなに戦いたいのかしら？」

ルイは嫌味を言うが、赤緒を嫌っているわけではない。むしろ信頼している。

素直じゃないな、と南は苦笑を浮かべながらも言葉には出さず、指示を出した。

「でも、今はモリビト2号しか出せる機体がないから、準備が出来たら向かうように赤緒さんに伝えておいて」

「別にモリビト2号しか出せないってことはないでしょ？」

「……………」

ルイの言葉に南は思わず黙り込んでしまった。ルイが言っていることはスサノオのことだろうと、南は分かっていた。

「……スサノオのことを言ってるんだったら、ダメよ。あれはまだ、エルニイが解析している最中だろうし、それに操主がいなければ意味がないわ」

「今日、その子に会うんじゃないの？」

「そうだったけど、いつまで待っても来ないし、あげくに、この騒ぎ！まったく、いい迷惑よ！」

いつの間にか、愚痴を言ってしまったことに気付いた南は、咳払いを一つして、「とにかく」と続けた。

「今は赤緒さんとモリビト2号にがんばってもらうしかないわ。じゃ、そっちの指揮はルイ、アンタに任せるからね！」

ルイは「ハイハイ」と、いかにも面倒くさそうに言って通話を切った。

南は携帯電話をしまうと、黒煙が上がっている方向に目を向ける。「それじゃ、私も行ってみるか」

そう言いつと、柊神社の階段下の車道脇で待機していた車に乗り込んだ。

*

バーゴイルは地上に降り、ハンドガン撃って工場を破壊している。周囲は炎の海と化し、黒煙が高く舞い上がっている。バーゴイルは中心にいる1機の黒いバーゴイルを囲むようにしながら破壊活動を行っている。

「オラオラ！さっさと出てこいよ、二本角！！」

黒いバーゴイルから音声が発せられる。声の主はカリスである。

黒いバーゴイルもハンドガンをとこころ構わず撃ち、滅茶苦茶に破壊している。

「オイオイ！このまま出て来なかったら、この街をメチャクチャにしてやるぜ！？ヒヤッハハハハハハ！！」

カリスの下卑た笑い声が響く。しかし突然、カリスのバーゴイル

の警報が鳴り響いた。

「アア？」

カリスのバーゴイルが後方へ飛ぶと同時に、前にいたバーゴイル2機が爆散した。そしてバーゴイルの進行を妨げるかのように、1機の青色の人機が勢いよく着地し、左手に持っている機銃砲の銃口を向けた。

「そこまですっ……！」

青色の人機から女性の声が響く。バーゴイルは攻撃を止め、青色の人機を警戒する。

「これ以上、街の破壊を続けるなら、私とこの『モリビト2号』であなたたちを倒します……！」

モリビト2号の操主――柊赤緒――はまっすぐバーゴイルを見据える。カリスはモリビト2号の登場に最初こそ驚いてはいたが、今は口を吊り上げていた。

「ヘッ、モリビト2号か。本当は二本角に用があるんだが、ちょうどいい。モリビト2号を持って帰っても充分いい収穫になる。よし、お前ら、仕掛ける……！ついでにモリビト2号をオレのものにしてやる……！」

カリスが叫ぶと、バーゴイルはモリビト2号に接近戦を仕掛けた。「いきますっ……！」

赤緒も気合いを入れ、戦闘態勢になる。

バーゴイルはまずハンドガンで攻めてきた。赤緒はモリビト2号の脚部のバーニアを軽く噴かせ、跳んで回避する。少し浮いた状態で横に移動しながら機銃砲を撃って迎撃する。しかし、戦闘に慣れていない――操主になってから、まだ一カ月ほどしか経っていない――赤緒の撃った銃弾はバーゴイルの機体にうまく当たらない。

「くうう……当たらない」

次に、赤緒はしっかりと照準をバーゴイルに合わせるようにするが、その動きに集中しすぎてモリビト2号の動きが止まってしまった。

「止まってる、あつという間にやられちゃうぞ!!」

「え……? きゃああああ!!」

カリスの声が聞こえると、コクピットに衝撃が襲う。カリスの黒いバーゴイル・バーゴイル・シザーがモリビト2号にハンドガンで攻撃していた。ハンドガンの見た目は量産型のバーゴイルと同じだが、機体と同様にカスタマイズされているのか、威力が通常より高く、モリビト2号の装甲が削れていった。

赤緒はモリビト2号の右腕に装備されている巨大な盾をかざし、攻撃を凌ぐ。

「オラオラ! 動かなかつたら、的と同じだぜ? それとも、こういう風にやられるのが好きなのか? アハハハハハ!!」

「ぐうう……」

カリスの容赦のない攻撃に、赤緒は歯を食いしばりながら耐えていた。

「へえ、さすがに頑丈だな。だったら、これならどうだ!？」

バーゴイル・シザーがハンドガンをしまつと、両肩に収納されていたカマ状の刃を両腕に装備した。そして、加速をつけて接近戦を仕掛けてきた。バーゴイル・シザーは荒々しく腕を振り回し、モリビト2号を追い詰めていく。

「こ、このままじゃ……負けちゃう」

赤緒は何とかこの状況を打破しようと策を考えようとするが、攻撃を凌ぐことで必死だった。そして、バーゴイル・シザーの強烈な一撃を受けたモリビト2号は後ろへ吹き飛ばされ、倒れ込んだ。

「きゃああああ!!」

赤緒はモニターを見ると、一面に各部損傷を知らせる画面が写し出されていた。

「ハッ、人機が良くても操主が素人じゃ、こんなもんか。さあて、どうしてやるのか?」

カリスの狂気の笑みを見て、赤緒は背筋が凍るのを感じた。

「でも、私はあきらめない……」

しかし、赤緒の意志は死んではいなかった。

*

戦場から少し離れた森に、透と舞奈はいた。透は冷や汗を浮かばせながら戦闘を見ており、舞奈も少し緊張した顔をしていた。

「あれって、昨日僕たちが倒したやつだよね……？一つだけ黒いやつがいるけど」

「そうよ。バーゴイル。敵の人機で大量生産されている。ようすに量産型ね。だから、昨日私たちが倒しても、すぐに生産され、戦場に投入する。あれを倒しても、何の解決にもならないわ。あの黒いのは強化型ね。一機だけというところを見ると、八将陣が乗っていると考えられるわね」

「そんな……」

舞奈の解説を聞いた透は、顔が青ざめていくのを感じた。同時に一つの考えも浮かんだ。

「じゃあ、あの黒いのを倒せば何とかなるんじゃないのか？」

「そうね。でも、モリビト2号でもかなりのダメージを受けてるみたいだから、厳しいことは確かだわ」

「モリビト2号……？」

「あの青い人機よ。モリビト2号は頑丈にできている人機だけど……。追い詰められているわね……」

舞奈が言っている間にも、モリビト2号はバーゴイル・シザーに圧されていた。今やモリビト2号は守りに徹してしまっていた。

「他に仲間はいないの！？」

「いないことはないけど、人機はまだ戦える状態じゃないのよ。他に戦える人機は、たぶん……」

舞奈は、その先を言う事を言い淀んだ。そのあとに続く言葉が何なのか、透は感づいた。

「まさか、スサノオ……？」

「……そうよ。君が、君と私しか戦える人はいない」

「……また、戦えって言うのかよ!？」

透は思わず叫んだが、一方の舞奈は落ち着いていた。

「私たちが戦わなきゃ、モリビト2号はやられてしまう。そうなれば、街は破壊され、たくさんの人が死んでしまうのよ!」

「……だからって、別に僕じゃなくてもいいだろ」

「透……」

舞奈は諭すような顔を透に向けた。その顔を見て、透は舞奈から視線を逸らした。

「分かってる……。分かてるつもりだよ、さっき学校で君に言われたから。どうして僕なのかを。……でも、僕は素人だ。今、何が起こっているのか、何が起ころうとしているのか知らない、ただの子供だ。そんなやつを戦わせるより、プロの人が戦った方がいいよ」

「……………」

舞奈は透の言葉を静かに聞いていた。

「前に君は、スサノオは僕と君しか動かせないって言ったけど、回収していったんだから、調べて、何か分かったんじゃないの?」

透は舞奈に聞いたが、舞奈は首を横に振った。

「いいえ。仲間の操主の子を乗せてみたけど、起動すらしなかった。やっぱりスサノオは君しか動かせない」

「そんな……」

二人の間に、沈黙が続いた。しばらくして、舞奈は、ふっ、と短い息をこぼし、真剣な目つきで透を見た。

「透。モリビト2号の操主は、柊赤緒さんよ」

「……え?」

舞奈の言葉を、透は一瞬、理解できなかった。理解することを拒絶したのかもしれない。クラスメイトの友人が自分と同じようにロボットに乗って、今まさに戦っているなんてことは、透には信じられなかった。

「柊さんが、あの青いロボットに……?冗談だろ……」

「本当よ。赤緒さんは、一か月くらい前にモリビット2号を起動させ、戦闘も行ったわ。今はモリビット2号の正式の操主よ」

「……どうして、柊さんが。そんなこと、一言も……」

「言えるわけないでしょ？自分は巨大ロボットのパイロットで戦っているなんて。軍の極秘事項でもあるのだし。現実味がない話ですよ。それに、たとえそれが事実でも、君に心配かけたくないから言わないでしょうね」

「……柊さん」

透の様子を見て、舞奈は悲痛な面持ちになる。しかし、彼女は現実を口にする。

「人機を動かすことができるのは、操主だけ。その操主の中でも、人機の力を最大限に発揮させることができる人を、血統というの。血族のほとんどは女性で、中でも赤緒さんは特に強い力を持っていると考えられているわ」

「……だから、戦わせているのか？柊さんを」

体の奥底から煮えたぎった熱い感情が徐々に湧いてくるのを透は感じた。しかし、舞奈は臆することなく続けた。

「たぶん違うわね。赤緒さんが自分から言っただんじやないかしら。私は赤緒さんとは一度しか会ったことがないけど、彼女は言っていたわ。私が戦うことで街やみんなを守るのだったら、戦うって。みんなを守ってみせるって。でも、相当悩んでいたみたいよ。自分には人機を動かせて、戦う力があることに。」

「……………」

柊さんらしいな、と透は思った。赤緒は悩みなどを一人で抱え込んでしまうところがある。それは、舞奈が言ったとおり、人に心配をかけたくないからである。そして、自分で何とかしなければと、一人で解決しようと無理をすることもある。赤緒とは三年の付き合いで、そのことを理解している。しかし、透は赤緒の悩みに気付いてあげることができなかった。自分はスサノオの操主になってしまったことを嘆き、頭がいっぱいになっていった。赤緒も同じことで

悩んでいるはずなのに。

突然、建物が倒れるような大きな音が耳に入ってきた。音がした方向を見てみると、モリビト2号が後ろに倒れていた。

「柊さん!!」

透は思わず叫んだ。すると、聞き覚えのある声が響き渡った。

「ヒヤッハハハ!! たいしたことねえな! 正直、拍子抜けだぜ。血統だって聞いてたから、強えと思っていたが、弱すぎだ!……まあ、弱いヤツを^{なぶ}黷るのは好きだから、いいけどよお!!」

カリスは狂ったような笑い声を上げ、バーゴイル・シザーはモリビト2号を何度も殴ったり、踏みつけたりしていた。

「あの声は、昨日の……!」

透がそう言うと、また聞き覚えのある声が聞こえた。それもよく聞く少女の声を。

「私は、負けない……。負けられないんだ。きゃあああ!……っ、守るの。街や、みんなを……。私がっ、くううう……」

「!! 柊さんっ!?!」

同じではない。赤緒の方がずっと立派だ。

赤緒の必死の声を聞いて、透は思い知らされた。自分の器の小ささを。

透には赤緒の姿が眩しく感じた。赤緒には、戦う覚悟がある。街を守るため、友人たちを守るために、本気で戦っている。怖いはずなのに、死ぬかもしれないのに逃げずに立ち向かっている。

それに比べて、自分はどうか。力があるのに立ち向かおうともせず、逃げている。赤緒のように、守りたいものがないのも理由の一つかもしれない。しかし、逃げてどうなる。逃げてても何も解決しない。事態は悪くなるばかりだ。自分が望んだ退屈で、しかし平和な日常は昨日で終わっただのかもしれない。あの穏やかな日々を戻りたい。だが、時は戻らない。ならば、取り戻すしかない。そのためには。

呼ぶのだ、鬼を

頭の中で声が聞こえたような気がした。

信じる正義を貫き、信じる悪を滅する破壊の鬼を

「戦おう」

「え……？」

透の突然の呟きを聞いて、舞奈は透を見た。

「戦うんだ。あいつは敵だ。敵は倒すんだ。僕が、僕たちが」

「透、あなた……」

普段と様子が違う透に、舞奈は少し戸惑ったが、すぐに彼の意志を受け取った。

「わかったわ。なら、急いで基地へ行くわよ。今、南さんに連絡して車に乗せてもらうから、それで基地まで……」

「その必要はないよ」

「え？」

「僕が呼ぶ。スサノオをここに」

「呼ぶって、透……？」

透は舞奈を無視し、大きく息を吸った。そして。

「来い、スサノオオオオオオツツ……！！」

透は全力で叫びを上げると、眩い光が二人の視界を覆う。その直後に地面を揺らす衝撃が襲い来る。

光が治まり、二人は目を開けると、そこにはスサノオが堂々と立っていた。

2 - 2 (後書き)

今回はモリビト2号を、少しでもですが戦わせました。
次回はスサノオが戦います。お楽しみに。
感想・指摘・応援お待ちしております。

2 - 3 (前書き)

お待たせいたしました。第2話完結です。続きをお楽しみください。

スサノオが透の元に現れた頃、軍の基地内は騒然としていた。その中でも格納庫周辺は特に慌ただしかった。それもそのはず、つい先程まで、格納庫の中にはスサノオがいたからである。そのスサノオが突如、眩い光を放ったと思いきや、居なくなっており、どこに行っただと思いきや、モリビト2号が戦っている周辺地域に出現したとの情報が入り、混乱していた。

この事態に、エルニイも動揺していた。エルニイは彼女を中心とした人機研究チームのメンバーとスサノオの解析を行っていた。その最中、エルニイの目の前でスサノオは姿を消したのである。

「一体どうなってるの？勝手に消えるなんて、どんな技術が使われているんだよ！？」

「ちよつとアンタ！」

立ちつくしているエルニイの後ろから、少女の声が耳に入る。振り返ってみるとルイが近づいてきた。

「ルイ、大変だよ！！スサノオを調べていたら、勝手に光って、したらスサノオが消えたんだよ！一体、どんな技術なのか、気になっしょうがないよ」

エルニイはやや興奮しており、目を輝かせていた。一方のルイは少し鬱陶しそうな顔をしていた。

「知ってるわよ。もう聞いていると思うけど、工場地区から少し離れたところにスサノオが現れた。……アンタ、一体何やらかしたのよ？」

「ボ、ボクは何もしてないよ！でも、いろいろ分かったことがある」
エルニイは途端に真剣な顔になった。ルイも真剣な面持ちになる。
「スサノオには他の人機と同じ、血塊炉けっかいろがあつて動力も血塊けっかいだけ、装甲の材質が違っんだ。それが何なのか分からないけど、モリビト2号よりも頑丈だと思う。内部の構造も他とは違っし、それに……

解析できない部分があったんだ」

「解析できない？解析する時間がなかっただけじゃないの？」

「それも、あるかもしれないけど……。でも、すぐにその部分を見つけて、ボクはずっとそこを解析していたんだけど、ボクの端末を使つてでもアクセスできなかった。……とにかく、スサノオには他の人機にはない、何か特殊な能力があるのは確かだよ。それが何なのかは、じっくり解析してみないと分からないけどね」

一通り説明を終えて、エルニイは、ふう、とため息をついた。

「なるほど。ま、私にはどうでもいい話ね」

説明を聞いたルイの感想は、この一言で片づけられた。エルニイは、えっ、と言ったような顔になった。ルイにとっては「どうでもいい話」だったらしい。

*

透も舞奈も目の前で起こったことに驚愕していた。スサノオの名を叫んだだけで、基地にいるはずの機体が突如出現したのだ。しかも一瞬で。

「ほ、本当に、来た……」

透は自分のしたことに驚いていた。頭の中から聞こえた謎の声が、スサノオを呼べ、みたいな事を言っていたので、その通りにしてみたら、本当に来たのである。

「これは……」

一方の舞奈は、透のことにも当然驚いてはいるが、スサノオにこのような機能があったことに驚いていた。そして、この現象に見覚えがあるから困惑もしている。

二人はスサノオに近づくと、胸の緑色の部分が開き、コクピットが飛び出てきて、そこからワイヤーが前と後ろの座席から地面に吊り下ろされてきた。いかにも、スサノオが二人を導いているかのようだ。

「乗れってことか……」

「どうするの、透？」

舞奈が尋ねてきた。尋ねるというよりは、確認しているのだろう。透の覚悟を。

「やってみるさ。敵を放っておくわけにはいかないしな」

透の返事を聞いた舞奈は頷き、ワイヤーを掴む。ワイヤーの先端には足を掛けるところがあり、そこに足を掛けると上へ上がって行った。二人がコクピットに座ると、コクピットは機体の中に収納された。

「システム、全て異常なし。昨日と違って今日は全力でいけるわよ！」

「よし、いくぞー!!」

透がペダルを踏むと、脚部にあるノズルから燃焼ガスが噴射され、スサノオはいきおいよく跳び上がった。いった。

向かうは、敵がいる工場地区である。

その頃、モリビト2号は追い詰められていた。バーゴイル・シザーに襲われ続け、所々火花が飛び散っており、煙が上がっていた。巨大な盾も破損し、もはや盾としての役目を果たしていなかった。コクピットの中では、アラームがずっと鳴り響いていた。

「ぐ、うううう……」

赤緒の口からうめき声が漏れた。しかし、赤緒の体に怪我はない。悔しいのだ。自分の無力さを実感して。初めてモリビト2号を動かしたとき、一体感のようなものを感じた。トレースシステム―操縦者の動きを機体が再現する全身を使った操縦―のおかげもあるかもしれないが、それ以上の何かを感じた。そして敵を初めて倒したとき、自分はこの街を脅威から守ることができると思えた。しかし、今は不様に倒れ、敵に好き放題されている。あの時の自分は自惚れていたのだと思い知らされた。

「さてと、そろそろ飽きてきたし、終りにすつか……」

カリスが下卑た笑みを浮かべていた。その顔を見て、背中から嫌な汗が流れ落ちるのを感じた。

怖い。でも、逃げるわけにはいかない。

今の赤緒には、そんな使命感のようなものだけが原動力だった。

「あきらめない……。絶対に……っ！」

そんな言葉が思わず漏れた。

「死ねええええっつっ!!」

カリスの叫びと同時にバーゴイル・シザーのシザーアームが振り上げられ、そして。

別のアームが鳴った。モリビト2号が何かをキャッチした。モニターを見てみると、何かが上空から接近していた。

「チッ……何だ!？」

カリスは周囲を見回していると、前方の上空から何かが降下してくるのが見えた。バーゴイル・シザー目掛けて。

「クソッ!」

バーゴイル・シザーを後方へ下がらせると、先程までバーゴイル・シザーが立っていた場所に「それ」は着地した。

赤緒は信じられないと言ったような目をした。最後に見たのは出撃する前で、基地の格納庫でいろんなケーブルに繋がれていた。解析のため、しばらく出撃させないとエルニイが言っていたのを思い出した。しかしどういいうわけか、目の前にはその人機が、スサノオがモリビト2号を守るかのように立っていた。そして、こちらを心配しているのか、体半分をモリビト2号に向けた。

「す、スサノオ……? どうして、ここに……」

赤緒はスサノオに通信を入れようとしたが、バーゴイル・シザーがシザーアームを振りかざしながらスサノオに接近しているのが目に入った。

「やっとなれたな、二本角!!」

「あぶない!!」

赤緒は思わず叫んだ。しかし、スサノオはすでに気付いていたらしく、すぐに正面に向き直る。スサノオは左腕下に装備されている刀の鞘でシザーアームを受け止めた。

「何っ!？」

「でやああああっ!!」

そして、スサノオはすかさず右のストレートをバーゴイル・シザーの顔に叩きつけた。

「ぐわああああ!!」

バーゴイル・シザーは吹っ飛ばされ、背中から地面に倒れ込んだ。す、すごい……」

赤緒が呆けていると、通信が入ってきた。回線を開くと、見覚えのある女性と、そしてよく知っている馴染み深い少年の顔が写し出された。

「え、と、透君!? スサノオに乗っているのって、透君なの!？」

「……ああ、そうだよ」

「で、でも、どうして……? 私、何が何だか……」

赤緒が混乱していると、舞奈が通信に入ってきた。

「二人とも、いろいろ聞きたいことがあるかもしれないけど、今は敵を倒すことに集中して。赤緒さん、私たちが戦うから、あなたは下がっていて」

「え……でも」

赤緒は、ちらりと透に視線を送る。

「あいつは僕たちで倒す。君は下がっているんだ」

それだけ言って、通信を切った。

「透君……」

赤緒は詮索するのを止め、透の無事を祈った。

「いくぞ……」

鞘から太刀《叢雲》むらくもを抜き、前方にいる二機の量産型バーゴイル

に向かって地面を滑るように駆け抜ける。前は動かすだけで精一杯だったので、結果守りに集中してしまっていたが、今回は後ろにいるモリビト2号も守るために、攻めていく。

二機のバーゴイルは、ハンドガンで迎撃する。スサノオは左右に動きながら銃弾を避け、避けきれないものは盾で防ぐ。当たっても頑丈な装甲を持つスサノオには大したダメージにはならない。その行動を取りながら、バーゴイルとの距離を縮めていく。

そして、弾切れになったのか銃撃が止み、バーゴイルの動きが鈍くなったところで、スサノオをさらに加速させ一気に距離を縮めた。

「でやあああああ!!」

透は加速を緩めることなく、通り過ぎざまに、《叢雲》を薙^なぐ。

斬られてから一歩遅れて、バーゴイルは爆散した。透は爆発に見向きもせず、二機のさらに前にいるバーゴイル・シザーへ向かう。

「ハッ、オレとやろうつてか？調子こいてんじゃネエぞ、ガキが!!」

スサノオに殴られてから、すでに体勢を整えていたバーゴイル・シザーもスサノオに向かって走り出した。

「このおおおお!!」

《叢雲》を振り下ろすが、バーゴイル・シザーは横に動いて避ける。

「なっ!?!」

「もらったあああっ!」

隙ができたスサノオを横からシザーアームで切りかかる。

「させるかっ!」

透はバーゴイル・シザーの動きにすぐに反応する。盾をバーゴイル・シザーに向け腕を横に伸ばし、シザーアームを受け止める。バーゴイル・シザーの動きが止まったところですかさず、《叢雲》の刃先を向け、そのまま突きを繰り出す。

「おおっと!」

しかし、バーゴイル・シザーはその攻撃も横に動いて避け、隙だ

らけになつた右横の腹部にシザーアームを切りつけた。

「うわああああ!!」

「くううっ!」

スサノオがよろめき、舞奈はキーボードを目にもとまらぬ早さで打ち込み、姿勢の制御を行った。しかし、バーゴイル・シザーが目の前にまで迫っていた。

「オラオラ、止まってるやられちまうぞ!」

「くそっ……!」

シザーアームがコクピットを狙っていることに気付いた透は、とつさに《叢雲》を横にして構え、かろうじて受け止める。そして力任せに腕を押し出し、反撃しようとしたが、バーゴイル・シザーは後ろへ跳んで距離を取った。

「ハア、ハア……。あいつ、速い……。攻撃が全然当たらない」

透の息はすでに上がっていた。戦いの緊張もあるが、攻撃が当たらないことによる焦りも出ていた。モニターの一つにスサノオの状態を示しているものがあり、目を通してみる。先程受けた攻撃は致命傷にはなっていないが、ダメージはやや大きかった。

「バーゴイル・シザーが通常のやつよりも性能が良いこともあるけど、パイロットが八将陣の一人で強化人間というのが厄介ね……」

舞奈もやや息が上がっており、落ち着いてはいるが少し緊張しているようにも見られた。

「ど、どうするんだ。このままじゃ……」

「大丈夫。スサノオが簡単にやられはしない。それに、君はちゃんと相手の動きを見て、対応できていた。あとは――」

「ハッ、やるじゃねえか。二本角?」

突然、男の声が耳に入ってきた。通信がかかっているところを見ると、どうやらオーブンチャンネルによるものようだ。透はこの声に聞き覚えがあった。

「その声、おまえは……」

「ああ? テメエは昨日のガキじゃねえか? そうか、テメエが二本角

の操主か！」

カリスの狂ったような笑い声が耳障りに感じた。

「どうして、街を破壊するんだよ！？街の人たちは何も関係ないだろ！？」

「ハア？そんなのブツ壊したいからブツ壊してるに決まってるだろ。それ以外の理由なんかネエよ！街の人だあ？そんなの知るかよ。ハハハハハハハハハハ！！！」

「……っっ！！」

カリスの言葉に透は絶句した。そして、体の奥底からマグマのように煮えたぎった熱い感情が湧いてくるのを感じた。

「壊したいから、壊す……？そんなバカげた理由で街を壊されてたまるかよっ！！」

「透、落ち着いて！！」

透は舞奈の制止を振り切り、スサノオに居合の構えを取らせる。

「チツ、ムカツクガキだぜ。調子こいてんじゃねえぞ！！」

カリスも苛立ち、バーゴイル・シザーを走らせようとした瞬間、後ろから衝撃が襲いかかった。

「ぐわっ！……クツ、何だ！？」

カリスが後方を映すモニターを見ると、座り込んでいるモリビト2号がかろうじて上がっている左手に機銃砲を持たせ、銃口をこちらに向けているのが見えた。その銃口から煙が上がっていた。

「モリビト……テメエ！！」

「今です、透君っ！」

赤緒が叫ぶと同時に、スサノオが居合の構えを取ったまま猛烈な勢いで迫ってきていたのを、カリスは見た。

「そんな攻撃がオレに当たると……な、何っ！？」

カリスは回避行動を取ろうとしたが、先程までと違い、明らかに動きが遅くなっていた。

「ど、どうなってやがる！？」

モニターの一部を見ると、推進装置の一部が破壊されていた。

狙っていたわけではないだろうが、たった数発撃っただけで推進装置に当て破壊することができた、ある意味、赤緒の勘の良さにカリスは驚愕した。しかし、カリスにはいつまでも驚いている余裕はなかった。スサノオがすぐそこまで来ていた。

「うおおおおおつつつ!!!」

透の気迫の居合切りが放たれた。

「なめるなああああ!!!」

カリスはバーゴイル・シザーの脚にあるバーニアを一気に噴かせ、上空へ飛んで避ける。

スサノオの居合切りはバーゴイル・シザーの胴体を切らず、両足の膝下を切り落とした。目の前で小規模の爆発が起こり、煙が舞い、周囲が見えなくなる。

「くそ、煙で見えない……アイツは？」

「……!透、上っ!」

舞奈に言われて上を見ると、両足を切り落とされたバーゴイル・シザーが上空から降りてきた量産型のバーゴイルに両腕を抱えられて、飛び上がっていくのが見えた。

「……逃げられたか」

「無理に追う必要はないわ。それにしても、今日はとても上手に戦えたね。昨日動かしたのが初めてなんて嘘みたいを感じるわ」

「そ、そうかな……」

透は舞奈に褒められ思わず照れるが、すぐに気を取り直し「それよりも」と続け、《叢雲》を鞘にしまいモリビト2号へ歩を進める。

「……大丈夫か、柊さん？」

「う、うん……。大丈夫。透君は……?」

「ぼ、僕も大丈夫……」

「そ、そっか……。良かった」

赤緒に声を掛けるが、ぎごちない会話になってしまった。透も赤緒もお互い聞きたいことがあるのだが、何から聞けば良いのか分からず黙り込んでしまう。透が何か言おうと口を開こうとした瞬間、

赤緒が先に口を開いた。

「わ、私、基地の方に戻るね……」

「え、ちよ、ちよっと待ってよ！聞きたいことが……」

「ごめんね……。でも、私からはまだ、何も言えないの……。南さんっていう人が、いろいろ教えてくれると思うから、だから……ごめんなさい」

「……………」

赤緒はそれだけ言うとお通信を切った。そしてモリビト2号が立ち上がり、脚にあるバーニアを噴かせて、飛び去っていった。

透は、ただモリビト2号の姿が見えなくなるまで、飛んでいった方向を見つめているだけだった。

2・3（後書き）

第2話は、物語に大きな展開を見せることはありませんでした。

今回の話は、透君に戦う覚悟を少しでも持つてもらおうと思って書きました。

これでちょっと男らしくなったと思いませんか？

男と言えば、両兵が出てこなかったです……。その事に気付いたのは書き終えてからでした。両兵ファンの方、申し訳ございません。さて、次回から第3話のスタートです。戦いはさらに激しくなる……。と思います。と言っても、いつも通り学校からのスタートですけど……。あと、ちゃんと両兵も出ますからファンの方はご心配なさらずに。

感想など、お待ちしております。

3 - 1 (前書き)

お待たせいたしました。第3話スタートです。

工場地区での戦闘から、すでに数日が経っていた。あの後、透はスサノオから降りて帰宅した。自分も基地に行つて事情を説明するべきではないのか舞奈に尋ねたが、「あとのことは私が説明するか、帰つて休んで」と言われた。透としても、そうしてくれた方がありがたかった。二日連続で戦い、体力よりも精神的に疲れていた。そんな状態でいろんな事を言われたら、倒れるかもしれないと思つていた。

テレビでも巨大ロボット同士の戦いということで、毎日放送されていた。モリビト2号は以前にも言われていたが、そこへさらにスサノオが現れたので話がますます大きくなってしまっている。しかし人間、良くも悪くも、熱しやすく冷めやすい性格をしているらしく、数日も経てばこの話題は毎日聞くこともなくなる。高校でも、最初は生徒たちが大騒ぎしていたが、今ではその話題の話をするのはごく一部だけで、いつも通りの学校生活をおくっている。

「……………」

しかし今、透は少し緊張していた。現在、昼休み。場所は学校の屋上。雲一つない快晴にもかかわらず、幸か不幸か、屋上には人一人いなかった。そして、目の前にはクラスメイトの柊赤緒がいる。

「え、えつと……話つて、何かな？」

赤緒は透から視線を逸らし、伏し目がちになっていた。

「その、この前の戦いのことなんだけど、さ……………」

透はぎこちなく話を切り出した。二人が屋上にいるのは、透が赤緒を連れ出したのである。戦いの翌日、赤緒は普段通り明るかった。しかし、透に負い目を感じているのか、透に対してはややぎこちない素振りを見せることもあった。黄坂南から話があるだろうということだったのだが、数日経った現在、そんな連絡はなかった。そこで今日は思い切って赤緒に尋ねてみようと思い、今の状況に至るの

である。

「僕には、この街に何が起こっているのか、よく分からない……。でも、君が戦っているということは、あの時分かった。……どうして、君が戦っているんだ？君が操主ってやつだからか？」

「……うん」

赤緒は静かに答えた。透もわかっていた。舞奈が言っていたように、赤緒は操主でありその中でも強い力を持つ《血統》であるということを聞いていた。そして《血統》は人機の操縦に長けていることも聞いた。だからと言って、赤緒が戦う必要はあるのか疑問に感じてしまう。赤緒は操主であること以外は普通の女子高生である。そんな彼女を戦わせていることに透は不安と不満を感じている。しかし、透は知りたくもあった。戦う理由を。それを知ること、自分に自信を持つことができるかもしれないと思っていた。

「だからって、無理して戦う必要なんてないだろ？」

「……でも、私は戦わなくちゃいけないの」

「だから、どうして……！」

「あ、あの、すいませ……あ」

透が問い詰めようとすると、赤緒ではない少女の声が耳に入ってきた。声が聞こえてきた方を振り返ると、気弱そうな小柄の少女の姿があった。二人の姿を見て、はっ、とすると急に申し訳なさそうな顔になった。

「あ、あの、すいません。お邪魔ですよね！」

「え……？」

「お邪魔って……なにが？」

「え、えっと、だって今、先輩たちは、その……してたんですよ？」

「？」

「だって、お昼休みに屋上で二人きりで……。それに、なんだかすごくいいムードで……。でしたら私、その、で、出直しますから！」
少女が何を言おうとしているのか二人は理解した。

「ちょ、ちょっと待ってよ！別に僕たちは……」

「そうだよ。全然違う。私たちはそんなのじゃないから。ね、透君？」

「そ、そうだね……」

赤緒の言葉に透は複雑な気持ちになった。違うと言われれば違うのだが、はつきり否定されると、男としては悲しいものを感じてしまう。少女も「ならよかったんですが」と言っているの、ますます落ち込んでしまう。

「それで、私たちに何か用事？」

「あ、それは、えっと……。その……。だから、あの……」

「落ち着いて。ね？」

「あ……」

緊張する少女の肩に、赤緒は優しく手を乗せた。怯えるように体を震わせている少女が、赤緒の優しい視線を感じて、震えが消えていくのが見てわかった。

「大丈夫。私はこうして、あなたの話をちゃんと聞いている。だからゆっくり、話して」

「は、はい……」

赤緒が優しい目をして落ち着かせると、少女は、ほっとしたのか少し笑みを浮かべていた。自分にはこんな気配りはできないだろうが、赤緒はさすがだな、と透は思った。警戒心と怯えがひいた少女は、それでも恐る恐るといった様子で、赤緒に尋ねた。

「あの、先輩は柊神社の人……なんですよね？」

「ええ、そうよ」

「だったら……この前、柊神社に現れた刀で戦ってたロボットのこ、何か知りませんか！？」

「ええっ！？」

少女の核心を突くような質問に、先程まで口を閉じていた透は驚き、思わず声を出してしまった。少女が言っているのは、スサノオのことだろう。

「そ、それは、ね……」

赤緒も、予想外のことを尋ねられどうすればいい、と聞くかのように透に視線を送っていた。スサノオに乗っているのは、赤緒ではなく自分だから、自分が答えるべきなのだろうが、しかし、気が利く言葉をうまく言えない透にとっては窮地に立たされている状況だった。

「……聞いたらいけないことでしたか？」

二人の様子に不安を感じた少女は、恐る恐る聞いた。

「その、ぼ、僕たちもわからないんだよ。あれが何なのか」

「う、うん！あの時、私たち神社にいたけど、いきなりあのロボットが飛んできて。そ、それ以上のことはなにも……」

「そちらの先輩も、柊神社の方なんですか？」

「ぼ、僕？いや、違うけど……。でも、柊神社で時々お世話になっているから、一応関係者……かな」

「はあ、そうなんですか……。じゃあ、工場と一緒に戦ってた青いロボットのことは知りませんか！？」

「ええっ！？」

今度は、赤緒が驚きの声を上げた。青いロボットとは、もちろんモリビト2号のことである。透はモリビト2号のことを何も知らない―乗っていたのが赤緒ということ以外―ので、透は赤緒に視線を送る。

「え、ええっと、ごめんね。私、あの時は工場の近くにいなかったからわからないの……」

「そちらの先輩は？」

「ぼ、僕も知らないんだ。あれが、何なのか……」

「なんでもいいんですっ！！知っていることがあれば教えてください！お願いしますっ！！」

「ご、ごめん。ほ、本当に何も知らないの。力になってあげたいのは山々なんだけど……」

「そ、そういうことなんだ……悪いね」

「そ……そうですか。わかりました……」

「あ……」

二人の返事を聞いて、少女は肩を落とした。そして、その表情は鈍いと言われる――主に勝世に――透にもわかるくらい残念そうで、寂しそうだ。一瞬そんな表情をのぞかせた直後、自分がすごく唐突な質問をしたことに気付き、気恥ずかしさと申し訳なさが入り交じった表情で、二人に頭を下げた。そんな少女を見て、二人は心が痛むのを感じた。

「私の用事はそれだけです。変なことを聞いて、すみませんでした……」

少女の殊勝な態度に、透は赤緒に顔を向ける。赤緒としても、このまま帰すのは気の毒に感じた。しかし、口止めされているので、うかつな発言はできなかった。

「……こちらこそ、力になれなくてごめんなさい。な、何かかわかったら教えるからね?」

「は、はい……」

少女は最後にもう一度、頭を下げ「失礼します」と言っ、屋上を後にしていった。

「よっぽど知リたかつたんだな、あの子……」

「うん……」

「……やっぱり、教えるわけにはいかないんだよな」

「うん……。あの子が危険に巻き込まれないためにも……ああっ!」

「な、何だよ、いきなり大きな声を出して」

「私、あの子から何も聞いてない!名前も、クラスも、メアドも!何かわかったら教えてあげるって約束したのに!」

「……教えるわけにはいかないって、今言っただじゃないか。だったら聞かなくても同じだろ?」

「そ、そうだけど、でも、やっぱりだめ。彼女に嘘はつきたくないもの。私、ちよっと思って行く!」

「行くって、どこに?」

「一年教室！急げば、まだ間に合うかも！」

「ちょ、ちよつと待てつて……！」

赤緒は透の制止の言葉を聞かずに、走っていった。こういうまっすぐな所が赤緒の良いところであり、悪いところでもある。

「それにしても……」

透はあの少女に疑問を感じていた。なぜ、何のために、彼女はあそこまで真剣になって人機のことを知りたがっていたのか。先程のことを思い返し、透は僅かな不安を感じていた。

透が一年生の教室へ向かうと、廊下で赤緒が立っているのを見つけた。

「あの子は？」

「はあ……はあ……はあ……。だめ……見失っちゃった……」

今まで走り続けていたのか、赤緒は息を切らせながら、答えた。

結局この日、二人は少女と再会することはなかった。そして、透は自分を取り巻く環境が徐々に変わっていくのを感じていた。日常の世界が、非日常に侵食されていくかのように。

*

いつもとは違う、どこか重たい空気のまま、放課後を迎えた。

「透君。……今日は神社によつていかない？」

校門から出ると、赤緒が透に突然尋ねてきた。

「なんだよ、急に……」

「ほら、あれ……」

「……………」

透は赤緒が指さす方向を見る。そして、あるものが見えて口を閉ざした。

赤緒が指さす方向には城ヶ崎市の街並みが一望出来、その先にある高台には柊神社があり、神社の周囲には物々しい車両が多数停ま

っているのが見えた。

「自衛隊……か」

「五郎さん、大丈夫って言ってたけど、本当に大丈夫かな？あはは……」

この重い空気を何とかしようと思ったのか、赤緒は笑ってみせるが、薄ら寒いこの空気が変わることはなかった。

「……行こう。そろそろちゃんと、話を聞かなくちゃ」

「透君……」

赤緒は心配した顔を向けるが、気付いていないのか、透は黙ったまま柊神社へと向かった。

直立不動で二人に敬礼する自衛隊の人たちに軽く頭を下げながら、二人は神社に辿り着いた。

「ただいま」

「お邪魔します」

二人が玄関に入ると、柊神社の神主である柊五郎が出迎えに来た。「お帰りなさい。あら、透君もいらっしやい。ちょうどよかった」

五郎はそう言つと、透に顔を向ける。

「透君にお客様です。すぐに客間まで来てくれませんか？できれば、赤緒さんにも来てくれるとありがたいんですけど」

「……わかりました」

「私も出ます」

そう答え、二人は客間へと向かった。外とは違い、客間は静けさに包まれていた。入ってみるとそこには見覚えのある姿が二つあった。

「こんにちは、神野透君。君と最後に会ったのは、柊神社での戦闘の後だったわね」

最初に声をかけてきたのは、長い黒髪の女性、黄坂南だった。そして南の隣には。

「久しぶり、透」

高校の制服ではなく、青のジャケットに青のベレー帽を被った舞
奈だった。

3 - 1 (後書き)

中途半端なところで区切ってしまったみたいですが、そこは次回お楽しみに、ということですのでよろしく願います。
感想などお待ちしております。

3 - 2 (前書き)

お待たせしました。続きをお楽しみください。

透は南と舞奈の向かい側に座り、赤緒も透の隣に座る。南は出されたお茶を一口だけ飲むと、透の目をまっすぐ見て真剣な面持ちで口を開いた。

「失礼だと思ったけど、あれから君のことを調べさせてもらったわ。訓練もなしに人機を動かした……。正直、驚きに値するわ」

「……それは、やっぱり僕が……」

透がその続きに言おうとしていることを分かっている南は、一度頷き、続きを言った。

「そう。君は『血統』よ」

「……………」

透は何も言わなかった。舞奈からある程度のことは聞いていたので、別に驚くわけでもなく、また悲しむわけでもない。これが現実だと受け入れ、静かに南の言葉を聞く。南も透が何も言わないので話を続ける。

「それじゃ、本題に入りましょうか。私たちが今日ここに来たのは、君に話しておくことがあるからよ。私たちのこと……。そして人機のこと……。本当はもっと早く君に会って話すべきだったのだけど、始末書を書いたり、事後処理をしたりとかで忙しくて……。そんなの、あの人に任せればいいのに……」

「は、はあ……………」

後半から愚痴になっていたの、透はどう言っているのか分からずあいまいな相槌を打つしかなかった。

「……南さん。話が進みませんよ」

舞奈が静かに言っていると、南は「あはは」と照れ笑いをして、そして再び真剣な顔になった。

「私の名前はもうわかってると思うけど、改めて自己紹介するわね。私は黄坂南。南米ベネズエラで『アンヘル』という組織に所属して

るの」

「南米って、確かロストライフ現象が頻繁に起こってる……」

「ああ……それわね。報道規制がかかった名称」

「規制……？」

「『キヨム』という組織と、私たち『アンヘル』との戦争。それがロストライフの正体よ」

「戦争……」

馴染みのない言葉を聞いて、透は緊張した。しかし、やはりな、と簡単に現実を受け入れ冷静になっていることに、内心驚いていた。南が話を続ける。

「……その戦争に使われていたのが『人機』。君と舞奈が操縦した『スサノオ』も、工場での戦闘で君より先に戦っていた『モリビト2号』もその一つよ。まあ、スサノオは南米での戦いの後にできたものだけど」

「……そんなものが、どうして柊神社に？それに、あんなものが落ちてきたら、このあたりなんかただじゃすまないはずなのに」

「輸送中に、敵の攻撃を受けてね。やむなくここに着陸させたの。」

このあたりが無事だったのは、『リバウンド』って呼ばれる血統が持つ特別な能力のおかげ。あのとき私の他に舞奈ともう一人いて、その子がリバウンドを使って神社に落下するコンテナを遠隔操作して、無事に着陸させた。仕方なかったとはいえ、これは私の責任よ。いまさらだけど、ここで謝らせてもらうわ。……赤緒さん、透君。本当にごめんなさい」

南は頭を深く下げて、透と赤緒に謝罪した。

「そ、そんな……。頭をあげてください、南さん。私も透君も怪我はしませんでしたから」

「そうですよ」

二人に言われて、南は頭をあげ、「ありがとう」と答えた。しかし、透は釈然としなかった。いろいろと言いたいことはあったが、今更そんなことを言ってもしょうがないと割り切るようにしていた。

それに、柊神社で暮らしている赤緒が許すと言っているので、何も言わないというのもあった。

「ところで透君。スサノオを動かした感じはどうだった？」

「……………」

南に聞かれ、透は自分の手を見ながらスサノオを動かしたときの感触を思い出した。

「なんていうか……………不思議な感じがしたんです。馴染むというか、知っていたというか、そんなようなものを……………」

透は、工場での戦闘でスサノオを呼び出すときに聞こえた声のよなものも思い出していたが、あえて口には出さないようにした。すると南の「やっぱりね」という呟きが透の耳に入った。

「理由はわからないけど、スサノオは君と舞奈じゃないと動かせないみたいなの。私の仲間にも赤緒さん以外の血続の子が二人いるんだけど、彼女たちが乗っても起動すらしなかった。……………変なこと聞くけど、君はスサノオを戦う前から知っていたってことはない？」

「……………知ってるわけじゃないですか。あなたこそ、何か知ってるんじゃないですか？」

透は訝しげに（いぶか）言うが、南は首を横に振った。

「私も、ほとんど聞かされてないの。スサノオを運んでいけ。ついでに舞奈をアンヘルの一員として迎え入れろって言われただけ。スサノオのことは舞奈から聞いたことだけしか知らない。舞奈もスサノオのことを詳しくは聞かされていなかったみたいだけど」

そこまで言っただけで南は舞奈に視線を向け、透も舞奈を見る。舞奈は申し訳なさそうに目を閉じていた。南は視線を透に戻し、話を続けた。

「もうひとつ聞きたいことがあるんだけど……………。工場地区での戦闘のとき、少し離れたところに突然スサノオが現れたのは知ってるわよね？あれは、君がやったことなの？」

「……………」

南に聞かれて、透は心臓が早鐘を打つように早くなっていくのを

感じた。南は透をまっすぐ見ていた。

「正直に話して。別に怒ってるんじゃないの。ただ、スサノオはあきらかに普通の人機とは違う性能を持っている。私たちはスサノオのことを何も知らないの。少しでもわかることがあるなら話してほしいの」

「……………」

南の様子を見て、本当に知らないようであるのを感じた。透は言うべきかわざるべきか悩み、そして。

「……僕が呼びました」

正直に言った。南は「そう」と言っ、さらに聞いてきた。

「どうして、そんなことができたの？そのときのことを詳しく教えて」

南に言われ、透はあのとときのことを思い出しながら、口を開いた。「僕もよくわからないんです……。頭の中で声が聞こえたような気がするんです。その、呼べば来る、みたいなことを言われて……。それで、呼んだら」

「本当に来たってわけね……」

南が続きを言っ、透は頷いた。それから南は口を閉ざし、考え込んだ。

「……あの、どうかしたんですか？」

「えっ、ああ……」

透がおそろおそろ聞くと、南は少し慌てた様子で応えた。

「人機には、瞬間移動なんて機能はないの。まあ、似たようなものならあるんだけど、今はいいわ。瞬間移動もそうだけど、操主なしで勝手に動くことはない。……やっぱり、スサノオには何か秘密があるわね」

そこまで言っ、南は再びお茶に口を付ける。そして、軽く深呼吸した。

「話が長くなってしまったわね。今の君にこんなことを言うのは気が進まないけど……はつきり言うわね」

南は語気を少し強くして言った。

「透君。私たちに力を貸して！」

南は頭を深く下げた。

「……………」

透はすぐに返事をする事ができなかった。戦いたくはない。しかし、敵はそんなこと関係なく攻めてくる。工場での戦いで、カリスが言った言葉が思い出される。

「ブツ壊したいから、ブツ壊す」

思い出すだけで、怒りが込み上げてくる。そんな無茶苦茶な理由で、関係ない人たちが死んでしまうなんてことは許せない。それに友人が傷付いているのを黙って見ているほど自分は薄情ではないつもりである。

しかし、自分に自信を持てないのもある。自分が戦えば、赤緒や街の人たちを助けることができるのか自信がない。むしろ、傷付けてしまうのではないかと悪い方向へ考えてしまう。

透はふと気が付くと、南がまっすぐ見ていた。

「本当は基地に置いておくべきなんだけど、基地から街までは結構距離があるの。瞬間移動も今のところあてにならないし。でも、ここなら人機を置くスペースがある。街が襲われてもすぐに駆けつけることができる」

「……………もしかして、またあいつらが？」

「その通りよ。『キヨム』の特殊部隊『八将陣』。奴らは……………恐ろしい相手よ」

「八将陣……………」

「今はまだ戦力が揃ってないらしく大人しめだけど、いずれ一気に攻めてくる。この国の兵器じゃ、奴らを止めることはできない。私たちはそれまでに何としても血統を集め、対抗する力をつけなくちゃいけないの。勝手な理屈だということとはわかってるけど……………」

「……………」

「お願い。スサノオの操主として、一緒に戦って……………！」

そう言つて、南は再び頭を下げた。今度は舞奈も頭を下げてきた。
「……………」

透は突然立ち上がり、廊下へと歩き出した。

「透君！」

「少し……気持ちの整理をさせてください」

自分でも聞いたことのない低い声が出たが、今の透にそんなことで驚く余裕はなかった。

「透……………」

舞奈が心配そうな目で透を見るが、透は何も言わず客間から出て行つた。

「時間が……ないのよ……………」

透の姿が見えなくなつてから、南が呟いた。

「お茶……もう下げてもよろしいですか？」

「うわっ！」

「ひ、柊さん……………」

南と舞奈の背後には、いつの間にか五郎が立っていた。

「ご、五郎さん！いつの間に、そこにいたんですか？」

赤緒も五郎がいたことに驚いていた。五郎は「今来たところです」と言つて、南に近づいた。

「黄坂さん。透君の答えはもう決まっていますよ」

五郎は三人に優しく微笑みながら言つた。

「その『人機』が、この柊神社に導かれた事、私には偶然とは思えません。そして、透君が居合わせたのも……………」

「五郎さん……………」

「ただ今は、少し戸惑っているだけ……………。ですから、信じて待ちましよう？」

「……………そうですか。私も結論を急ぎすぎました」

「私はあの子が決めたことに全てを委ねます。……………舞奈さん、透君をお願いしますね？」

「え……………」

五郎に言われ、舞奈は一瞬何のことかと思ったが、すぐに理解した。

「彼のところへ行つてきます」

「いつてらっしゃい」

舞奈は立ちあがり、透のあとを追いかけた。

*

「力を貸して……か」

透は柵神社の裏にある森で一人佇んでいた。

「僕が戦えば、街を守れるのか……？」

呟いていると、後ろから足音が近づいてくるのが聞こえた。

「やっと見つけた。私、この辺りの地形をよく知らないから少し探したわよ」

振り返ると、舞奈が歩いて透に向かっていった。

「渡良瀬さん……」

「舞奈でいいわよ」

舞奈は透の隣に立つと、透に聞いてきた。

「答えは決まった？」

「……僕は」

透は自分の右手を見て、答えた。

「街を……みんなを守りたい……」

「……」

舞奈は黙って透の言葉を聞いていた。

「でも……やっぱり、怖くもあるんだ。あんな奴らと戦うなんて……。だけど、もう引き返せないところまで来てるんだと思うんだ。だから懸けてみようと思う、自分の可能性っていうのかな、そういうものに」

透の思いを聞いて、舞奈は「そう」と一言だけ言った。しかし、言葉とは裏腹に舞奈の顔は綻はらんでいた。そんな舞奈の顔を見て、透

は心臓が高鳴ったのを感じた。

突然、茂みが鳴る音が聞こえた。

「っ！」

「だ、誰だ！？」

茂みから出てきたのは、三体の異形だった。顔があり、腕が二本、二足歩行をしているが、容姿は明らかに人間ではなかった。目は赤く光っており、瞳はない。目以外は白と黒の二色だけの、機械と人間の間の子のような機械人形だった。

「な、なんだ、あれ！？」

透が言うと同時に、舞奈は拳銃を撃っていた。しかし機械人形たちは足を止めず、二人に向かって歩を進める。銃弾は機械人形に傷を付けるだけで、ダメージになっていなかった。

「ここは私が食い止めるから、透は南さんに連絡してきて！」

「で、でも、それじゃ君が……」

「私なら大丈夫だから！行きなさいっ！」

舞奈はすばやく拳銃のカートリッジを交換させ、発砲し続ける。

「……………」

しかし、透はその場から動かなかった。

「何してるの！？早く行つて！」

「君を一人にして行けるかよー！！」

「っ！？」

透の銃声にも劣らない叫びに、舞奈は思わず振り向いた。透の顔には先程までの迷いを感じられず、決意が表れていた。

「今の僕はスサノオを動かすこと以外、特別なことはできない。足手まといになっているかもしれない……。だから僕だけ逃げるなんて、そんなこと出来るわけないだろ！？」

「透……………」

「決めたんだ……。戦うつて、街を、みんなを守るんだつて……。パートナーを助けられなくて、みんなを守るかよっ！！」

思いを打ち明けた直後、透の頭の中で突然スサノオの姿が浮かび

上がった。そして――

「スサノオオオオオツツツ!!!」

叫んだ。ごく自然に。こうすれば、また来ることを分かっていたかのように。

空が一瞬光ると、光は二人の視界を覆った。その直後、透の背後から衝撃が襲いかかり土煙が上がった。

二人は振り返ると、そこにはスサノオが立っていた。

「スサノオ……」

舞奈は静かに言つて、透を見る。透には動揺している様子が見られなかった。

「こつちに来るんだ!」

「え、ええ……!」

透は言いながら、スサノオの下へと向かい、身を潜めた。舞奈もスサノオの下へ向かい身を潜める。

「スサノオを呼ぶのはいいけど、あれを相手にわざわざスサノオで戦う必要はないというか、むしろ迷惑にならないかしら?」

「……し、仕方ないだろ? 追い詰められてたんだし……」

舞奈の指摘に、反論できなかった。しかし、機械人形たちはスサノオの出現に驚いたのか逃げようと後ろに下がっていった。

「あいつら、逃げるのか!?」

透が言うと同時に、突然スサノオの右腕が肩の高さまで上がった。

「スサノオが勝手に……」

「こいつ、僕たちが乗らなくても動くのか!?」

ひとりで動くスサノオを、二人は茫然と見ているだけだった。

そして、機械人形めがけて鋼鉄の拳が振り下ろされた。拳が地面にぶつかり、衝撃が地面や木々を揺らし、土煙が上がる。

衝撃が治まり土煙が消えると、スサノオは腕を元の位置に戻した。

機械人形たちが立っていたところにはクレーターのようにくぼみ、機械人形はただの鉄くずと化していた。

「あの一撃をまともに受ければ、さすがのゾールもこうなるか……」

舞奈は元はゾールだった鉄くずを見て呟いた。

「あいつら、ゾールっていうのか？……って、それよりもどうしてスサノオが勝手に動いたんだ！？誰も乗ってない……んだよね？」

「ええ。あれはスサノオが勝手にしたことよ。どうなっているのか、私にもわからないけど……」

「いやあ、さすがですね」

突然、二人の後ろから男の気の抜けた声が聞こえてきた。振り返ると、茂みからスーツを着た中年の男性が姿を見せた。

「……？」

「失礼ですが、あなたは？」

舞奈が男性に尋ねると、南が透たちに向かってくるのが見えた。

「やっぱりスサノオを呼んだか……。二人とも大丈夫？」

「ええ、なんとか……。それより南さん、この人は……？」

透は男性に視線を向けながら南に尋ねた。透は男性にただならぬ雰囲気を感じていた。目の前に世間を騒がすロボットが立っているにもかかわらず、まったく動揺していない。しかも口ぶりからして、先程までの出来事の一部始終を見ていたと思われる。

「はじめまして。私は政府直属の諜報課特務隊員の友次と申します」

「……名乗ってもいいの？」

「いやはは。これから一緒に仕事するんですから。当然でしょ？」

「諜報課のくせに、ずいぶんアバウトな人ね……」

「あなたに言われるとは意外でしたね」

友次はひょうひょうとした様子で、南の攻めを受け流していた。

「あ、あの、南さん。これはいい……」

透がおずおず尋ねると、南は咳払いを一つして答えた。

「私はこの東京にアンヘルの支部を作る。そのために、こちらの友次さんが協力してくれるのよ」

「日本におけるアンヘルの活動を円滑に遂行するために、私が派遣されてきたわけです」

「は、はあ……」

南と友次の説明を聞いて、透は適当な相槌を打つ。しかし、透の様子を気にすることなく友次と南は話を続ける。

「本当はもう一人いるのですが……まあ、そちらはまた後日紹介するということのひとつ……」

「準備が整い次第、私はアンヘル日本代表として八将陣との戦いに備える。透君が来てくれると……嬉しいんだけどね」

「……僕は」

南に言われて、透はためらった。スサノオを呼んだときのあの覚悟は本物である。しかし改めて問われると、本当にこれでいいのか迷ってしまう。

そんなことを考えていると、肩に手を置かれるのを感じた。振り向いてみると、舞奈が優しい目で透を見ていた。目を合わせると、一回だけ頷いた。それを見て、透は勇気づけられるのを感じた。

「戦います。操主として！」

南に向かつてはつきりと答えた。透にとっては操主として戦うという意思表示だけでなく、自分に自信を持つという覚悟も含まれていた。

「ありがとう。これからよろしくね！」

「はいっ！」

透は差し出された南の手を握った。しかし舞奈は素直に喜ぶことができず、言いようのない不安を感じていた。

3 - 2 (後書き)

勝手に動くななんて、もはや人機ではないような気がしなくてもないです……。

原作ファンの方、申し訳ございません。それでもかまわないのであれば、これからもご愛読よろしく願います。
感想などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4530p/>

JINKI EXTEND NEXUS

2011年1月26日00時25分発行